



連続フォーラム

「チョゴリときもの」 No. 22

国籍——国籍を選ぶとき その背景にあるもの

民族とアイデンティティ

在日社会と日本社会の変化と関係性

シリーズ
II

公益財団法人 京都市国際交流協会
連続フォーラム「チョゴリときもの」第22回
国籍—国籍を選ぶとき その背景にあるもの

民族とアイデンティティ

第1部 パネルディスカッション

日時 ● 2015年3月20日(金)

場所 ● kokoka 京都市国際交流会館

進行 ● 小倉紀蔵 京都大学大学院 人間・環境学 研究科 教授

パネリスト ● 朴実(パク・シル) 日本籍、在日二世、音楽家

● キム・ファン 韓国籍、在日三世、絵本作家、児童文学作家

● 張寿榮(チャン・スヨン) 韓国籍、在日三世、学生

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

はじめに

小倉紀蔵 京都大学大学院 人間・環境学研究所 教授

今回の連続フォーラム「チョゴリときもの」では、国籍について考えてみようということになりました。

在日コリアンにとって、国籍というのはきわめて切実な、まさにその人の実存と結びつくような問題でありつづけてきました。生まれた瞬間から日本人であることが自明であるような、ふつうの日本人の感覚からは、在日コリアンの国籍意識というものをリアルに理解するのはむずかしいかもしれません。

この問題に悩んで人生や社会に違和感を抱いたり、あるいは家族のなかで不和が生じたりといった在日コリアンの「悲劇」を、わたしたちはよく耳にしてきました。自分の周囲でそういうことがじつさいに起きている人もいることでしょう。

わたしたちは、この日本社会に暮らすある特定の出自の人びとが、この問題によって心に傷を負ったり、同胞どうしで傷つけあったりするようすを見て、心を痛めざるをえません。

しかしこれは、じつに複雑な事情がからまりあっている問題なので、そんなにかんたんに「ひとつ」の答えを出せる問題でもない、ということも事実です。

少し考えただけでも、たとえば日本と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と大韓民国（韓国）という三国の関係、日本社会の同化主義的傾向、在日コリアン家族の家父長制的な傾向など、国籍をめぐるむずかしい問題の原因は、多様で複雑なのです。

その多様性と複雑性を無視して、この問題をめぐってある特定の国家や組織や個人などを激しく批判するということもかつては多かつたわけです。たとえば、国籍問題をふくむ在日の生の困難さの原因をすべて日本社会の差別意識のせいにする一方的な見解や、「日本国籍を取得する在日は裏切り者だ」などといった乱暴な議論がかつては堂々とまかりとおっていました。

しかし、これらは複雑な事情を単純化したり、「悪者」をつくりあげることによって、困難な問題を直視することを回避しようという振る舞いだったのではないかとわたしは思います。

さまざまな理由によってこの日本社会に暮らすようになったコリアンの方がたが、自由に、堂々とだれにも批判されずに、自分の国籍を選択できるようになっていたかどうかというのが、日本社会のすべきことであると思います。

そのためになができるのか。

課題はもちろん多数で多様なのですが、そのことを一歩一歩考えるためにも、まずは当事者の方がたのお話に耳を傾けるところから始めなくてはなりません。

2015年3月に2回にわたって行なった「チヨゴリときもの」は、右のような考えのもとに、世代の異なる在日コリアンの方がたのお話をじっくりうかがいました。

ひとことひとことが、とても重たく、そして意味ぶかい言葉でした。

それぞれの方がこの社会に生きてこられた軌跡と意味が、おだやかに語られる言葉のすみずみにまで宿っているような感じがしました。

在日コリアンの方々が生きてこられた多様な経験が、わたしたちのこの社会をゆたかにするのです。その経験をどのように生かして、この社会を次の世代に受け継いでもらうのが、わたしたちに問われているのだと思います。

司会 ● 定刻になりましたので、ただいまより「チョゴリときもの」第22回を開催いたします。

21年めを迎えた昨年から、このフォーラムはシリーズⅡとして再スタートをきりました。20年という時間は、在日コリアンの生き方や在日社会にいろんな変化をもたらしました。これにともない、このフォーラムに求められる役割も変わってきました。在日コリアンという集合体ではなく、一人ひとり異なる個人としての意見を交換していただき、現実への理解が深まることを願って、シリーズⅡをつくりました。

第22回のテーマは「国籍」です。2015年は、戦後70周年にあたりますが、日本の戦後の歴史は在日の歴史と重なります。パネルディスカッションに先立ち、前提となりますことがらを、みなさまと確認させていただきます。お手もとにお渡ししております年表(5ページ参照)に目を通していただけたらと思います。

現在、在日コリアンの国籍は、韓国籍、朝鮮籍、日本籍の3種類があります。朝鮮籍は、厳密には日本では国籍とは認められておりませんが、3種類あることを前提にいたします。

そしてもう一つ。これは多くの方が誤解しておられるようですが、「朝鮮籍」は「北朝鮮」あるいは「北朝鮮人」を意味するものではありません。また、その保持者のすべてが、かならずしも現在の北朝鮮の政治体制を支持するわけではないということも、あわせて申し上げておきます。

1910年に韓国併合で、朝鮮総督府が設置されて、植民地化が開始されます。当時の朝鮮半島には、大韓民国ではなく、大韓帝国が存在していました。その後、そこにいる人たちは日本籍をもつ朝鮮人、あるいは日本に来た人は朝鮮に本籍をもつ人びとという構図が成りたちました。

1910	韓国併合
1940	創氏改名 強行
1941	太平洋戦争開始 大韓民国臨時政府対日宣戦布告
1942	朝鮮人労働者募集の官斡旋開始
1945	終戦 朝鮮解放(帰国開始) 米占領軍総司令部(GHQ)は、「在日」は「解放国民」と「旧敵国民」の両義性ありとする 戸籍法適用外者の参政権停止 在日本朝鮮人連盟結成 国語講習所(民族学校)設置開始
1947	外国人登録令(勅令)公布(5月3日) 日本国憲法施行(5月3日)
1948	南朝鮮で単独選挙が実施される 大韓民国成立、北で朝鮮民主主義人民共和国成立
1950	朝鮮戦争開始
1952	サンフランシスコ講和条約発効 在日韓国・朝鮮人の日本国籍剥奪確定 外国人登録法公布
1953	朝鮮休戦協定調印
1959	日・朝赤十字社による「北朝鮮帰国協定」締結 帰国運動開始
1965	日韓基本条約調印 在日韓国人の法的地位協定調印
1966	出入国管理特別法施行 「協定永住」申請開始
2012	「外国人登録証明書」の廃止 「特別永住者証明書」の交付(通称名記載無)

*参考資料 『Q&A 在日韓国・朝鮮人の基礎知識』(仲尾 宏、明石書店、1997年)

1945年に敗戦を迎えるわけですが、その3年後の1948年に南に大韓民国が成立し、北には朝鮮民主主義人民共和国が成立します。これはなにを意味するかと申しますと、1910年の韓国併合、植民地化の開始以後、1948年に半島が分断されるまでのあいだに日本に来た人はすべて朝鮮人であり、日本国籍保持者であったということです。それは、1952年のサンフランシスコ講和条約の発効によって、日本国籍継奪が確定するまでつづきます。米ソ対立の狭間で半島が二分されたことで、在日コリアンにとっては、自分の国籍を考えるにあたって、あいまいな期間が存在することになりました。在日コリアンは、1965年の日韓基本条約の調印により、韓国籍として登録するか、あるいはそのまま朝鮮籍を保持するかを選択することになりました。ところが日本では、在日コリアンの国籍はその出生地域が現在の北朝鮮か韓国かで選択されていると思われることが多いようです。それがさきほどお話ししたような誤解を招いているようです。

在日コリアンの国籍選択と生き方

司会 ● 独立法人統計センター発表の資料によると、2014年6月現在、日本におられる韓国・朝鮮籍の中长期在留者、および特別永住者は約50万8千500人です。そのうち、在日と称される韓国・朝鮮人の特別永住者は約36万人で、約7割で、後3割は新しく韓国から来た人びとです。また、北朝鮮地域を本籍地としている方は、5年まえの2010年の時点で2千500人足らずですが、韓国に本籍地があっても、朝鮮

籍のままの方もいらつしやいますので、朝鮮籍保持者は、じつさいにはその3、4倍はおられるとみられております。そこには、「自身の祖国は一つである」、「一つの国に戻ってほしい」という思い、あるいはそうした在日一世の思いを尊重する在日二世たちの選択も含まれるでしょう。または、1959年の北朝鮮との婦国協定によって、ご家族が北朝鮮に帰国された方がたも多くいらつしやると思います。

グローバルな時代を迎えまして、韓国籍に変えられる方も増えました。また、生活の基盤は日本にあるとして、あるいはべつの理由から、日本国籍に変更する方も増えてきました。2012年7月9日からは、外国人登録証明書に代わり、特別永住者証明書が発行されることになり、暫時、切り替えが進んでいます。外国人登録との大きな違いは、新しい証明書には通名が表記されないということです。そんな関係で、通名で生活されている方がたは、日本国籍の取得につながっている状況が考えられます。

ただし、ここで重要なことは、在日コリアンの人たちの国籍の選択について、日本人はなんの判断も加える必要はないということです。深く重要な意味をもちます。在日コリアンの国籍選択について、本日は、音楽や児童文学、イラストなどの分野で活躍の三人のパネリストのご意見をお聞きしたいと思います。

それでは、パネリストを紹介いたします。向かって左から二人め、朴実（パク・シル）さまです。朴実さまは長らく学校における音楽教育に携わっていらつしやいます。お手元の資料にも記載しておりますが、日本国籍で本名を名のつていらつしやいます。その理由はのちほどお話しいただきます。

お二人めは、キム・ファンさまです。キム・ファンさまのお名前はペンネームです。自然や生きものをあつかった絵本や児童文学を日本や韓国で出版されています。クリゴカフェというお店のご主人でもあります。

三人めのパネリストは張寿榮（チャン・スヨン）さまです。張さまは現在、美術系の大学に在学されていて、この春から2回生です。先日、この会館の展示室で開催された『京都中高美術部&OG展ラポール展』に、朝鮮高校のOBとして作品を出品されました。

そして、進行役は、シリーズⅡを開始した昨年からご担当いただいております京都大学教授の小倉紀蔵先生です。では、よろしくお願いいたします。

小倉●みなさん、こんにちは。急に暖かくなってきましたね。毎年3月にこの「チョゴリときもの」のフォーラムで、在日コリアンの方にお話をうかがうということが、もう22年つづいています。20年間は仲尾宏先生が進行役をされていたのですが、昨年からは私がかかわることになりました。

このフォーラムの目的は、なんらかの結論を引き出すことではありません。あるいは、イデオロギー的に議論をすることでもありません。そうではなくて、在日の方の生きざまというか、それぞれにどういう「生」を営んでこられたのか。これからどうやって、この日本社会、あるいは京都という場所で、その「生」を営んでゆかれるのかをお聞きしたい。

京都にいらっしやる在日の方は2万5千人くらいだとすると、日本国籍を取得された方もいらっしやるから、コリアをルーツとされる方はじっさいはもつと多いわけです。型にはまった在日像というものはありません。ですから、できるだけ多くの多様な方たちのお話をお聞きしたいと考えています。

今年のテーマは「国籍」という、なかなか理解しにくい、難しい問題です。日本人にも理解しにくいし、



屈辱的だった十指指紋

当の在日の方がたにとってもたいへん複雑で難しい問題なのです。最初に10分ずつ、お三方に、ご自分の人生のなかで、国籍というものをどのように考えているか、そして国籍が自分の人生にどのようにかかわってきたのかをお話いただいて、そのあとで、お話にでてきた内容を展開したいと思います。

では、まずは朴実さんからお話しさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

朴実 ● アンニョンハシミカ。朴実といいます。私は在日の二世です。私の親、アボジとオモニは二人とも朝鮮半島でいちばん米がよく取れる、いまの韓国の全羅北道キョンギの農民出身で、植民地時代の1920年代にいっしょになりました。植民地時代は、日本による米の収奪が激しくて、農民であっても白い米をじゅうぶんに食べられないという状況下で、最初にアボジが仕事を探して、京都では在日がもつとも多い、JR京都駅のすぐ南の東九条にやってきました。3年後にオモニが本国で生まれたばかりの長男と長女を連れて、東九条を探して、なにもわからないままやって来ました。そして私は、日本が戦争に負ける少しまえの1944年の1月に生まれました。自分でもびつくりしますが、もう71歳になってしまいました。

私のアボジは、私が小学1年生のときに亡くなりました。オモニも12年まえに亡くなりました。私は兄弟のうちでも下のほうです。朝鮮のしきたりでは、長男が跡を継ぐのですが、その長男が日本人と結婚してからは、うちの環境は日本風になってしまいました。

私は、生まれてしばらくは日本籍だったのです。先ほどの資料にあるように、1952年のサンフランシスコ講和条約で、いったん朝鮮籍になりました。そして、理由ははっきりとわからないのですが、アボジがのちに在日本大韓民国民団という団体に入ったのでいったんは韓国籍になったのです。

それから数十年して、私も日本人との結婚問題がありました。日本人の女性の両親や家族が猛反対をして、彼女の母親が睡眠薬自殺を図ったのです。幸い未遂に終わりましたが……。彼女の父親は私に帰化をしてほしいと言ってきました。

私はそれまで国籍というものをあまり深く考えたことはなかったのです。長男夫婦をはじめ、周りの環境が日本風だったし、私も日本の通名を使っていました。私の兄弟は7人ですが、そのうちの4人は帰化していたので、私もいずれそうなるのかなというくらいにしか思っていなかったです。でも、小さいときから、漠然とした疑問はもっていました。なぜ両親が朝鮮人だったら朝鮮籍、あるいは韓国籍になるのだろうか。自分は日本で生まれて、日本の学校に行って、日本語しかしゃべれないし、日本の風習しか知らないのに、なぜ韓国籍や朝鮮籍の国籍になるのだろうか。

けっきょく、結婚の問題で、1970年に京都の法務局に帰化申請しました。当時は、帰化の手続きをするのに、個人のプライバシーがなくなるくらい、担当の職員はほんとうに失礼な態度で、上から目線で取



り調べのようなことがつづけられていました。帰化の条件として、「民族的氏名はだめだ」、「日本の苗字でないだめだ」というので、私はそれまで通名としてずっと使っていた「新井実」と書きました。

それからもう一つ、帰化の条件として、十指指紋の押捺です。のちに1本だけになりましたが、私たちのころは黒いインクで10本すべて、それも手のひらまでぜんぶ、強制的に採られる制度がありました。ひじょうに屈辱的で忘れられません。私はその審査にかよって、1年後に帰化が許可されました。

私はその過程で、「なにかこれは間違っている」と、疑問を感じました。とくに、10本の指紋を採られたときは、あの場所から逃げ出したかった。国籍を変えろというだけで、なぜこんなに屈辱的な目に遭うのかという疑問をずっともっていました。だいいち、いまも使われている「帰化」ということばもおかしい。「帰る」は「帰順する」という意味、「化ける」は「同化する」という意味です。そういうことばが、いまだに使われている。そのうち、私は2回、裁判を起こしまして、ようやく1987年に「新井」から「朴」に、民族的氏名を取り戻しました。これは、帰化した朝鮮人がはじめて民族名を勝ち取った判例で、それ以降、ソフトバンクの創業者の孫正義さんもそうですが、いろんな方が本名のみまで日本国籍を取れるようになりました。あの屈辱的な指紋押捺も、1991年に裁判を起こしました。最終的には国側が3年後に和解を申し入れて、それまでに採った約22万5千人分の指紋を廃棄処分することを条件に、裁判を終えました。

そういうかたちで、私はいま「朴」を名のっています。私には3人の子どもがいて、3人とも「朴」を名のって、

学校や社会で生活しています。2人の息子はそれぞれ日本人と結婚しました。その連れ合いも「朴」を選びました。私はどちらの苗字でもよいし、日本名と朝鮮名をつなげてよいし、違う名前をつくってもよいと思っただけですが、どちらも「朴」を名のついています。さらに、息子にはそれぞれ3人ずつ子どもがいるのですが、孫たちもみな、学校や保育園で「朴」と名のついています。

私は、小さいころはずっと朝鮮人であることを隠して、通名で生きてきたのです。それが、なぜ「朴」を名のようになったのかというと、その大きなきっかけは、子どもができたことなのです。子どもたちに自分のルーツを語らないといけないと思っただけです。子どもはこの社会で生きてゆくかぎり、学校に行っても、どこに行っても日本の教育は受けられるのですが、朝鮮人としての歴史やルーツはだれが伝えるのかといったら、自分しかいない。そのときに愕然としたのは、私は朝鮮人でありながら朝鮮人のことをなにも知らないということです。歴史も文化も言葉も……。それから一つずつ、いろんなことを自分なりに勉強しはじめました。そのときに、地域のみんなといっしょに始めたのが「東九条マダン」で、いまもつづいています。「チョゴリときもの」がはじまって今年で22回ですが、「東九条マダン」は今年の11月で23回です。

「朝鮮学校卒のきみには、受験資格がない」

朴(美) ● いまでも私は、民族、国家、国籍というものには、はっきりとした答えをもっていない。漠然としかたままですが、違うルーツ、違うアイデンティティや歴史性、いろいろなものをもっている人間同士がいっ

しよに生きてゆく場所として、「東九条マダン」をはじめたのです。

ご存じのように、東九条はいまも在日コリアンの多い地域です。調べてみると、戦後すぐの闇市の時代に「七条警察署事件」というものがありました。東九条には被差別部落出身者も多いのです。闇米売買を巡って東九条の同胞の多くが警察に連行されて、仲間を取り返しに行つたときに、地域の部落出身者と朝鮮人とで大乱闘になって、5人も死者が出たという事件がありました。

そして、その何年かのちに、「オール・ロマンス事件」も起こっています。あれも東九条が舞台です。でも、あの『特殊部落』という小説を糾弾する闘争の中では、「部落差別の小説である」としかいわれなかつたです。でも、じつさいの小説の本身は、主人公も主な登場人物も朝鮮人で、地域も東九条なのに、朝鮮人差別の実態にはふれられていません。だから、私は「東九条マダン」を通して、そういう差別の歴史を学び、差別される者どうしがともに理解しあつて生きてゆきたいという、そういう願いをもつてつづけてきました。でも、その過程においても、在日同胞の二世や三世たちから非難されました。「自分たちの奪われた歴史や文化を取り戻そうとする文化運動や祭りを、なぜ日本人といっしよにやるんだ」と言われたこともあります。

私はいまだに、民族や国籍というものにたいする答えをもっていません。ただ残念なことに、私のいちばん上の孫は中学1年生になるのですが、その孫が昨年、小学校からずっと同じクラスだった日本人の男の子とちよつとしたけんかになったときに、その子から、「チョーセン」と呼ばれたり、「チョーセン帰れ!」と言われたらしいのです。それがもう私にはほんとうにショックでした。なんでこんなに小さい子どもたちが、こんな言葉を口に出すのかと。

やっぱりこれは、いまのおとなの社会に問題があるからです。在日一世たちはものすごく苦勞しました。在日二世はそれを乗り越えようとした。在日三世はさらにその上に……。私の孫の在日四世はそういうものからもっと解放されないといけないのに……。私たちおとなの責任で、孫の世代に、人間が生きてゆく、朝鮮人が生きてゆく、日本人が生きてゆくうえで大切なものを創らないとだめだと思っています。

小倉 ● ありがとうございます。もっとお話されたいとは思いますが、またあとで、時間がじゅうぶんありますので……。

それでは、キム・ファンさん、どうぞ。

キム ● キム・ファンと申します。子ども向けの生きものの本を書いております、絵本作家、児童文学作家です。私は55歳ですが、自分の人生をふり返ってみますと、二つの選択というか、山があつたと思っています。一つは「日本学校か朝鮮学校か」。二つめは「朝鮮籍か韓国籍か」という2段階の選択です。朝鮮籍がすべて北朝鮮の国籍ではないことは、さきほど説明してくださったので、みなさんわかっているかもしれませんが、私の場合、朝鮮籍は北朝鮮を指すというニュアンスで、お話を聞いていただければと思います。

私は小学生のときに、かなりひどいじめに遭いました。民族差別をたくさん受けたのです。父親の親と兄妹はみな北朝鮮に「帰国」しました。田舎に住んでいましたから、周りの人たちからすれば、「北朝鮮に帰った、あの家族」ということで、どんなに日本人のように暮らしているも、朝鮮人と知られていたのです。私は「アオヤマヨシカズ」という通名で、普通の日本人らしく、日本の学校で、日本人として生きていました。でも、なにかあるとすぐに「朝鮮人は朝鮮に帰れ！」と、いじめられました。そういう辛い世界から逃



げたかったのです。どうしようかと悩んでいるときに、親戚が通っている朝鮮学校に行けば、なんとかなるんじゃないかということ、「朝鮮学校に行く」と考えたのです。

朝鮮学校に行くことに関しても、当時、私は小学校6年生だったのですが、先生方からは二つの異なる指導がありました。ある先生は、「きみは朝鮮人だから、朝鮮学校に行くべきだ」と。しかし、私の担任の先生は、「きみは日本で生きてゆくんだから、日本の学校に進むべきだ」と。二人の先生たちが言い争って、私はそのあいだで、「どうしたらええやろ」と思いながら、ぼーっと答えを待っていたのですが、やっぱり「いじめから逃げたい」という思いが強くて、朝鮮学校に行くことにしました。

もちろん、当時もいまも、私は日本国籍をもっていませんが、人生をふり返ると、朝鮮学校を選択したことは、「朝鮮に飛び込んだ」という感じの、人生の大転換点でした。朝鮮籍はもっていましたが、中学のころは、国籍についてはまったく頭になかったのです。ところが、高校生になり、大学生になると、いろいろな問題が出てくるのです。私の夢の一つは動物園の飼育員でした。だから、生物の勉強もして、動物園にも植物園にもしょっちゅう通って、写真も撮って、生きもののことを調べていたのです。でも、朝鮮籍の私は、飼育員にはなれなかつたのです。京都市動物園は京都市の管轄で、動物園の職員になるにはまず、京都市の職員にならなければなりません。それには国籍条項がある。朝鮮国籍の私は市の職員にはなれないとわかったときは、めちゃくちゃショックでした。動物園の飼育員になることを人生の目標として、生き



ものとかかわってきたのに……。

「じゃあ、獣医さんになろう」と切りかえて、大学受験をめざしたのですが、うちは小さなクリーニング屋でしたから、とてもじゃないが私立大学には行けなかった。ならば国公立大学に行こうと思ったら、そもそも受験資格がない。現在は、朝鮮学校の子供たちも国公立の大学を受験できますが、当時は朝鮮学校の子供たちが国公立大学に行こうと思えば、大学入学資格検定に合格するか、夜間の学校に編入するか、通信教育を受けるなど、いろんな「壁」があったのです。そのときにはじめて、国籍というものを意識しました。

でも、もつとも強く意識したのは、そのあとです。大学を出て、朝鮮学校の先生になって生物を教えていたのですが、やっぱり自分は生きものに関連した仕事がしたいと思い、とりあえずは学校を辞めて考えようと、実家のクリーニング屋を手伝っていたのです。ところが、おやじが病気になるまで、跡を継がなければいけなくなりました。クリーニング屋を経営するには、クリーニング師という免許が必要なのです。もしかすると、おやじは

死ぬかもしれないし、はやく免許を取らなあかんということで、受験の申し込みに行ったのですが、「きみには受験資格がない」と言われたのです。「国籍」の話からは少し逸脱しますが、「朝鮮学校出身のきみは各種学校卒業だから、中卒扱いにはならない」と言うのです。クリーニング師や美容師は、中学校さえ卒業していたら受験資格があつて、100人が試験を受けたら、99・9パーセントは受かります。ところが私は門前払いを受けました。「おやじは小学校しか出てへんのに、クリーニング師の免許をもっていますよ」と言ったら、「親父さんのことは知らない。とにかくきみには資格がない」と。「こんなことになるなんて……」と悩んでいたら、いまでも忘れませんが、京都府庁の方が、「あなた、私といっしょに闘いましょう」と言ってくださったんです。

そこで私は、当時の厚生大臣宛てに手紙を書きました。すると、大臣から「試験を受けていいですよ」という手紙が届いて、それでやっと試験を受けて、クリーニング屋のおっちゃんになったんです。厚生大臣から手紙をもらつてクリーニング屋になったのは、私くらいしかいないんじゃないですか。(笑)そのときです。「世の中は、国籍や出身学校で人を分けるんやな」ということを身に染みて思ったのです。

国籍を選べるがゆえの苦悩

キム● こういう実情を広くいろんな人に知ってもらうには、「外国人も日本に住んでいるんやで」ということをアピールしなくてはならない。作家になつて訴えようと、絵本作家、児童文学作家になったのです。

もう一つの山は、朝鮮籍から韓国籍になったときのことです。作家活動をつづけるなかで、韓国にも取材に行きたい、韓国でも自分の本が出ればいいなあ、と思うようになりました。そこで、おやじとおふくろに「朝鮮籍から韓国籍に変えて、俺は韓国で仕事する」と言ったら、これがまたすごい剣幕で、「韓国籍を取るのほぜつたいに許さん」と言うのです。いくら話し合ってもだめで、「なんでそこまで……」と、私は泣きまじしたよ、何日間も。「北朝鮮にいる親戚に迷惑がかかるからだめだ」というのです。

当時は、韓国の著名な評論家から韓国の出版社を紹介してもらって、コウノトリのことも取材していました。韓国のコウノトリの研究者からも「研究所に訪ねてきなさい」と、快く誘われていました。私は韓国籍を取りたくても取れず、ものすごく我慢していましたが、もう我慢できなくなって、大阪市にある韓国総領事館を訪ねました。ところが、その韓国総領事館がどう言ったかというところ、「親が変えないと言っているなら、あなた、もういちど親を説得しなさい」と。韓国総領事館の人ですから、朝鮮籍から韓国籍に変えるというのなら、「ウエルカムです。どんどん変えなさい」と言うと思っていたら、ちがいました。「あなたのアボジ、オモニを説得しなければだめだ。あなたの代々の族譜(チョッポ)はこんなに分厚い。あなたはここから抜かれるわけですよ」と。私は韓国で本を出したかったので、「法律的に」親との縁を切って韓国籍を取りました。それでも、親にはずっと反対されていましたから、国籍は2003年に取ったものの、しばらくは韓国に行けずにいたのです。

2005年9月のことでした。兵庫県豊岡市の「県立コウノトリの郷公園」で開催されたコウノトリの放鳥式典に、韓国の来賓の通訳として参加したのです。NHKのニュース番組で、皇族の方と私がいっしょに

いるところが映つたらしくて、親からすぐに電話がかかってきました。「お前、秋篠宮ご夫妻といっしょに映っていたな。これは家の誉れや。お前、もつとがんばれ。韓国に行け」と。そして、あんなに反対していた親も、すつと韓国籍に変えてしまいました。(笑)

「両親は「皇民化教育」を受けた世代です。そういう意味では、教育とはおそろしいものだと思います。これまでつかえていたなにかが、すつと取れたというとか、意地を張っていたものがなくなつたのか、両親は「日本国籍」を取りたいと言いだしたのです。日本国籍を取るために、司法書士の力も借りたのですが、北朝鮮に親戚がいるということもあつて、手続きが複雑で、けっきょくは頓挫してしまいました。このように私たちは、「日本籍か朝鮮籍か」、「朝鮮籍か韓国籍か」を選べるだけに、苦勞の連続なのです。私みたいな在日三世ですらそうですから、朴実先生たちが在日二世や一世は、もつとたいへんだつたと思います。

私は生きものの話を書く作家です。山の緑がどんなにきれいだとしても、それが杉ばかりだと、その山は豊かとはいえません。そこには、杉林でしか生きられない生きものしかいないからです。いろんな種類の樹木があるからこそ、それぞれの木に集う生きものたちが棲めるのです。自然というものは多様性があつてこそ豊かなのです。日本も、私たちのように、日本人みたいな韓国人みたいな中途半端な人たちもいてこそ、「豊かだ」といえるのではないのでしょうか。私自身は創作活動をつうじて、共生というものを訴えてゆこうと、そういう人生をいままさに歩んでいます。

小倉 ● ありがとうございました。朴実さんとキム・ファンさんのお話は、すごい物語ですね。かんたんに10分でお話をいただくこうというのは、失礼な感じがしてしまふほど……。

次は学生さんの張寿榮さん、お願いします。

日本国籍を取ること、日本人になること

張●張寿榮といえます。成安造形大学という私立大学に通う1年生で、この4月から2年生です。私は小学校、中学校、高校ともに朝鮮学校に通っていきまして、日本の社会に出て1年めという感じですよ。

私は生まれたころから朝鮮籍です。私の祖父母がそれぞれ植民地時代に日本にわたり、そこで結婚して父や叔母たちを産みました。祖父は在日本朝鮮人総聯合会で仕事を始めて、同じく父もそこで働いておりました。その当時の在日本朝鮮人総聯合会では、朝鮮籍でないと、「韓国籍の人は寝返った」と言われたのだそうです。ですから朝鮮籍でずっといたのだそうです。私は朝鮮学校に通っていましたが、国籍に関しては無関心でした。朝鮮学校に通っている友だちのなかには、朝鮮籍と韓国籍が大多数だったからです。日本国籍の方もいたのだそうですが、朝鮮籍と韓国籍との違いはとくに感じませんでした。私自身も朝鮮籍であることに、なにかしらの抵抗があったわけでもなく、まったくの無関心だったのです。

私が国籍について、最初の壁にぶつかったのは16歳のときでした。外国人登録証明書を取りに行ったときに、「朝鮮籍か韓国籍か」と父親に問われて、そのまま朝鮮籍にという感じでした。韓国籍に変えるということにたいして、なんとも考えていなかったもので、そのまま朝鮮籍でした。

高校も朝鮮学校に通ったのですが、国籍について少し考えたのは、大学に入ったあとでした。日本の大



学なので日本人の友だちも多いのですが、友だちとの会話で、私のルーツの話や国籍の話になったことがあります。朝鮮籍というのは北朝鮮の国籍ではないということを話したり、朝鮮籍なので韓国には行けないということも話したのです。

そのときに、「じゃあ、日本の国籍に変えないの」と友だちに言われたので、す。そのときに私は、けっこう衝撃というか、カルチャーショックというか……。そのときは感覚的に、「日本国籍に変えてしまうと、日本人になる」、「通名を使わないといけなくなる」というイメージが少しありました。やはりそういうところで、感覚的に「私は在日なんだ」と拒否したのです。ただのイメージなので絶対にそうなるわけじゃないのですが、どうしてもそういう意識があつて……。

韓国籍に変えることは、父親も母親も「変えるんやったら、変えなさい」という感じなのですが、やはり日本国籍となると……。父親と母親は「日本国籍でもいい」と言ってくれてはいるのですが、やはり自分が在日であるということを考えてときに、日本国籍に違和感をもったのです。ですから、私はずっと朝鮮籍のままです。韓国籍には変えることがあるかもしれませんが、日本国籍に変えるということは、私のなかではないだろうなという感じですが以上です。

小倉 ● ありがとうございます。張さんのお話は短かったですがおよそ20年間生きてらっしゃった実感がこもっていました。

自己紹介というかたちで、手短にお三方に国籍と自分の人生がどうかかわってきたかということをお話

していただきました。

第1部が終わるまであと15分くらいですが、いまの張さんのお話を取っかかりにして、お三方にもう一度ご意見をいただきたいのです。それは、「国籍」と、いわゆる「○○人」ということです。つまり、日本国籍を有するということが、日本人であるということは、日本においてはほぼ一致すると考える人も多いかもしれないですが、外国では、そうではないと考えるところも多いですよ。でも、歴史的な経緯があつて、「日本国籍を取ってしまうと、日本人になってしまうのではないか」という強い拒否感、あるいは、なんとなく嫌な感じ。そういうものがあつて、日本国籍を取れないという人もいると思うのです。便宜上というか、生活するうえで、日本国籍を取ったほうがいいのだけれど、そうすると「日本人になってしまうのではないか」と。

これについてはどうでしょう。朴美さんは日本国籍を取られたわけですよ。でも、お名前は「朴美」さんで、「新井美」から「朴美」に戻った。「日本人にはならない。だけど日本国籍は取る」という、そのところは峻別されているのでしょうか。

日本国籍を取ることと、民族的アイデンティティを守ること

朴美 ● 在日コリアンといつても、植民地化以来100年以上たちますから、いろいろな人がいるわけです。そういうなかで、私のように「帰化」という道で日本国籍を取った人は40万ちかくいます。

かつては同胞のなかでは、「帰化は民族の裏切者だ」と言われつづけてきたのです。でも、帰化というものもさまざまあって……。私の直接のきっかけは結婚でしたが、いちばん多いのは職業の選択です。どうしても学校の先生になりたいときや、公務員の資格を取りたいときなどには国籍条項がいたるところにありますので、日本国籍を取らないといけません。

あるいは、「家族ぐるみ帰化」といわれるのですが、「東九条マダン」の代表者の陳太一——個人名を出しますが、彼もじつは日本国籍なのです。彼は中学3年生のときに本名宣言をしたにもかかわらず、家族全員が帰化をしたために、戸籍ではまだ日本名なのです。そうして日本籍になっている人はいっぱいいるのです。ところが、同胞のあいだでは「あれは民族の裏切者だ」とずっと言われつづける。

私は1984年に、民族名を取り戻す裁判をしたときに、はじめは負けたのです。調べてみると、同じような人たちが日本各地にいっぱいいた。そこでみんなに呼びかけて、自分たちのことを「日本籍朝鮮人」といって、「民族名を取り戻す会」をつくったのです。はじめて10人ちかくで集まりをもったときに、日本人から受けた被差別体験もそうとうあるのですが、それ以上に、せっかく同胞社会に入ってゆこうと思ったのに入れなかったという、そういうくやしき気持ちがあるのです。私も、同胞の青年運動に入ろうとしたときに、日本籍だというので、「ここはお前のいるところじゃない。スパイか」と罵倒されたこともあります。

いまは社会全体が変わって、いろんな選択肢があると思います。私の7人の兄弟とその家族もすべて日本籍になりました。日本籍を取ることが善いとか悪いとかは、それぞれの事情がありますので、あえて言いま

せん。私は国籍がどうであっても、その人の生き方を認める方向であってほしいと思います。私の孫の次の世代になっても、自分たちのアイデンティティを大切に、朴だったら朴、金だったら金、李だったら李で、そうやって生きてほしいなあと。私は国籍と民族、あるいはアイデンティティというものはべつに分けて、それぞれの個性として認めてゆくべきだと思っています。

小倉 ● ありがとうございます。日本国籍を取った人はこうだ、韓国籍の人はこうだと、型にはめるのではなくて、国籍、文化、その人の地域での役割、職業、重要なことばの問題、そういうものをすべてひっくり返して、それぞれの人がそれぞれの個性で生きている、そういうことですね。ありがとうございます。

キム・ファンさんはいかがでしょう。「日本国籍を取得する」ということは、日本人になってしまう」、そういう意識があって、そこに抵抗感があるということはありませんか。

キム ● そういうことを私はあまり意識したことはなかったのですが、朴実先生のお話を補完する情報をみなさんに紹介したいと思います。もう亡くなられたのですが、深沢夏衣という小説家の方が書いた『夜の子ども』という、在日のなかでとても話題になった小説の一説があるので、それを少し読ませていただきます。

「たとえば俺たちには四等までの身分制度がある。一等は民族的主体をしっかりと持っている主義者で、もちろん朝鮮語のできるやつ、二等は主体性はあるけど朝鮮語のできないやつ、三等はそのどっちも欠落しているが、国籍がちゃんとしているやつ、四等は帰化したやつ、という具合にね」。

「その上、一等朝鮮人は、北だ南だと互いの民族的主体性の正しさについて争っている。これが俺た

ちの姿なんですよ。日本人から見れば、一等も四等もくそもない、みんなただの朝鮮人なのに……」。

「朝日混血は何等人間だ？」

「混血なんか物の数にも入ってないさ。彼らがどんな思いでいるかなんて、だれも考えてみようともしないさ。混血は透明人間だよ」。

こういう小説のくだりがありまして、私は国籍で悩んだときに、この本を何十回も読みました。「ああ、こんなことにしばられへん世の中がくればよいな」と思って、子どもたちのためにどうしたらよいかということをおもいました。

小倉先生がいわれたことに関していえば、「動物園の飼育員になりたかったときに、国籍を変えればよかったかな」、「獣医師さんになりたかったときに、日本国籍を取ればよかったかな」、「そのまま、日本の学校に通えばよかったかな」と、まったく後悔してないわけではないですが、当時はそういうことにたいして頑なでした。子どもたちはみんな韓国籍なのですが、「お前がしたい仕事があったら、日本国籍を取ってもいいし、韓国籍のままでもいいし、きみたちの自由にしなさい」と言っています。

ただし、その子どもたちがそんな思いで日本籍を取ったのに、それを日本社会が理解してくれるかどうかがいじです。たとえば彼女たちが日本国籍を取って、日本の社会で生きてゆくという決断をしたときに、「もともとの日本人じゃないじゃないか」というようにみる社会ならば、やめたほうがいいと。国籍にとらわれない生き方をするということは、それと同じくらい、社会がそれを受け入れる必要がある。そんな社会になっ

てくれればいいとは思っています。それはかんたんなことではないと思いますが……。

小倉 ● ありがとうございます。いまご紹介いただいた小説に出てくる「一等、二等、三等、四等」というものが現在もあるかどうかかわからないですが、かつてはそういうものがはっきりとありましたよね。いわゆる一等の在日は、民族的な主体性をもって、しかも言葉が話せるということが重要だと考えている人もいて、そういう人たちが若在日の人を捕まえて、「お前は民族性の主体性が欠けている」、「言葉もできないものが朝鮮人と言えるのか」などと、説教を超えた、なんというのでしょうか、精神的な圧迫を加えることがたくさんありました。現在でもそういうことがあるのかどうかわかりませんが、逆にそういうことがまったくなくなってしまうと、言葉を勉強するモチベーションも若干はなくなるかもしれないという面もありますから、難しい問題です。

張さんはいかがですか。日本国籍を取得する考えはないとはっきりとおっしゃいました。それはやはり、自分の人生において、職業選択などとはべつに、日本人になることにたいする抵抗感みたいなものが、自分のなかにあるということでしょうか。

張 ● 私は成安造形大学でイラストレーションを学んでいます。将来は絵を描く仕事に就きたいと思っています。そこでは、たぶん、国籍というものはあまり関係なく、国籍にとらわれずに活動できるのではないかと思うからです。正直いって、日本国籍にならないという意識のなかには、職業がどうという話ではなくて、私のなかで少し拒否感のようなものがあるのです。

私の父は、在日の人たちの結婚の相談所のような仕事をしております、帰化した人の結婚の話をよく

するのです。「日本の人は、帰化した人とお見合いをしてくれない」と。けっこう極端な考えだとは思いますが、日本の方は、「なんで私が帰化した人とお見合いをしなくてはいけないのか」と言うのだそうです。帰化した人は日本の人とお見合いをしてもらえない。だから、在日のお見合いの相談所を訪ねてくるのだと言っていました。

私は父から、「そんな考え方をする日本人とは私はつきあいたくないから、もしお前が日本人と結婚するつもりで日本の国籍に変えるのだしたら、申しわけないが、お前は一人でそれをやってくれ」と言われました。「その日本の人たちとつきあうのは、お前だけにしてくれ」と。もちろん、そういう人たちばかりではありません。父はぜひぶん極端な考え方をしていると思うのですが、そういう考えをもっている人が近くにいるので……。そういうことはいけなかなとも思うのですが、日本人と結婚することや日本の国籍をもつことにたいして、拒否感みたいなものが、少し芽生えてしまっているところがあります。

小倉 ● ありがとうございます。少しわかりにくかったのですが、「帰化した人とは結婚はしないが、朝鮮籍や韓国籍の人とは結婚する」という話なのですか。

キム ● 日本人からすると、結婚相手は出身も純粋な日本人でないとだめ、帰化した人は受け入れられませんよ、ということだと思えます。

小倉 ● なるほど。帰化した人が、韓国籍、朝鮮籍の人よりもよくないという話ではないわけですね。

張 ● そうですね。

小倉 ● はい、わかりました。ありがとうございます。お父さんの強い気持ちをかなり引き継いでられる感じ

がします。

こういう問題は、在日側の問題でもありますが、日本社会側の問題でもありますよね。日本社会が根本的に変わらなくてはいけないということと、もうこれだけ年月も過ぎて、変わったはずなのに、まだ変わっていないというもどかしさや悲しき、そういうことがあると思います。しかし、日本社会の問題をここで論じはじめると長時間になってしまうので、そのところは、きょうのセッションではふれません。日本社会がこのままでよいということではなくて、これまでも変わってきたが、もっと変わらなくてはいけないということをお前提として、ひとまずおいておきます。

「気持ちよく」日本籍を取るには

小倉 ● 在日の話に戻ると、たとえばアメリカにはコリア系アメリカ人がいますよね。自分たちのルーツは大切にしておくけれど、国籍は、もう少しプラグマティック——実用的に考えるタイプの国も多い。むしろそのほうが多いと思います。

日本の場合、植民地支配をした相手の人たちがたくさんいらっしやるということで、イデオロギー的にもかなり難しいし、心情的にもウェットな感じで、着脱可能なものとして国籍を考えられないということがあります。日本社会がそういう考えをもっていると思うのです。でも、遠い将来はどうなればよいのかということについて、第1部の最後に少しお聞きしたいのです。

現在はまだ差別も残っているし、日本と韓国、日本と北朝鮮とのあいだで歴史問題も解決していないので、実用的に考えることは難しいとは思いますが……。将来、たとえば、コリア系日本人だとか、中国系日本人、ブラジル系日本人というようなかたちで、自分たちのルーツをおさえておけば、〇〇系日本人というかたちで共存、共生していけばよいとお考えでしょうか。それとも、やはりそのところは、日本と朝鮮半島の関係はほかの国とは違ってきわめて特殊な関係だから、将来もそのような実用的なかたちにはならないだろうとお考えなのか、そのところをお聞かせいただけますか。

朴(美) ●私が民族名を取り戻す裁判をはじめたときは、日本籍者の集まりには二つの名称がありました。私たちはけつきよく「日本籍朝鮮人」と名のつたのですが、もう一つは、「朝鮮系日本人」、あるいは「コリア系日本人」。でも私が「日本籍朝鮮人」ということにこだわったのは、やはり朝鮮人という、あるいは韓国人でもよいのですが、この日本社会でまだまだマイノリティとして差別されている現状があったからです。それで、私はあえて「日本籍朝鮮人」と名のつて、その名称を広めようとしたのです。

ところが、在日社会は、もう100年以上の歴史があるのに、いまだに日本籍をタブー視するのです。日本籍になるには、帰化をするほかに、最近はとくに日本人との結婚にともなう帰化が増えてきましたので、生まれてくる子どもは多くの場合、最初から日本籍をもっています。それなのにタブー視されてきた。でも最近、事情はだいぶ変わってきました。どの在日の家庭でも、日本籍者が親戚にだれもいないということとはほとんどなくなりました。だから、あえてこのことを、自分たちの将来の問題として考えたいのです。

私の活動している東九条では、かつて3割は韓国籍あるいは朝鮮籍だったのが、2005年の国勢調査では、

約15パーセントに減っています。さらに2010年の国勢調査では、10パーセントを切ったのです。帰化がそれだけ進んだり、あるいは国際結婚が増えたからです。そういうことも含めて、私たちはこの日本社会で差別されてきたコリアン、朝鮮人として、いつしよになってそれを解決してゆきたいという願いで、取り組んでいます。

キム ● 私も、ほぼ同じ考えです。自分は京都市民として生きているのに、民族的な帰属は朝鮮半島なのです。だから、空中分解するわけです。民族的には向こうで、住民としてはここなのです。

私は通訳をしたり、本を出したり、仕事上は韓国籍が便利だし、有利だから選んだのです。若い子たちは自分の人生において、自分が表現したいことがあれば、それには日本国籍のほうがよいならば、取ってもいい。「気持ちよく」日本国籍を取って、日本人になれるようにしてほしいけれど、「気持ちよくない」のです。この部分は、日本の方がたがハードルを低くしてくれれば……。異様な拒否感というものがなくない社会が、豊かな社会ではないかなと思っています。

小倉 ● 日本国籍のことはそうなのですが、「〇〇系日本人」という言い方については、どうなのでしょう。たとえば、キム・ファンさんが将来「韓国系日本人」というようになることには……。

キム ● 私はいま韓国で仕事をしていますので、そうはならないと思いますが、自分の子どもや親戚が、その生き方が自分の人生にとってよいならば、どんどんそうするべきだと思います。

ただし、何回も言いますが、過去にもいろいろありましたし、現時点でも差別はあります。職業をするためにやむをえず、自分の信念を曲げて目的を取るのではなくて、「気持ちよく」——いちおう文学者やのに、

そこがうまく表現できないのですが……。そのあたりをみなさんに、「どうしたら彼ら彼女たちが、なんの抵抗もなく、一市民としていっしょに豊かな社会をつくって、気持ちよく日本人になれるか」ということを、こちらの立場になって、考えていただければと思います。

張●私は「日本人になる」ということにまだ抵抗がありますが、私の娘や孫の代に「〇〇系日本人」になるということにはたいしては、自然の摂理というか、将来はそうなってゆくだろうという考えはあります。私は朝鮮学校に通っていましたが、最近、日本の学校に通う子のほうが多くなってきて、日本の国籍を取る方も多くなっています。そうなることにたいして、私自身は抵抗を感じても、キム・ファンさんがいうように、「気持ちよく」日本人になれるのだったら、それでいいと思うのです。私の親や祖父母は苦勞して生きてきましたが、日本の国籍を手に入れて、幸せになってくれるのだったら、それでよいと思うのです。それがいちばんよいと思えるような、そういう社会になるなら、私はそれに大賛成です。

小倉●わかりました。ありがとうございます。何回も申し上げますが、これは日本社会の問題ですよ。

小熊英二という社会学者がいます。彼の研究によれば、1945年以前の日本は、われわれが考えているものと違って、多民族国家だった。「五族協和」という表現がよいかどうかはわかりませんが、日本というなかには、いわゆる日本人という存在だけではなくて、多様な存在を包摂した日本というものを構想したわけです。それがもののみごとに崩壊して、逆に戦後には、「日本は単一民族国家だ」という意識が普遍化した。そして、日本はむかしからずっと単一民族国家だったというような神話までできてしまった。それは正しくないですよ。つまり、単一民族国家が日本の本質ではないわけです。元に戻るといえるか、戦後にでき

あがった単一民族国家という虚像から脱する時期に、いまわれわれはさしかかっているのかもしれない。

少し話が難しくなってきましたが、第1部の終了予定を10分くらいオーバーしましたので、このあたりで閉じさせていただきます。第2部が始まるまでの休憩時間に、みなさん、ぜひご質問を書いてください。後半の第2部では、おもにご質問に答えるかたちで進めたいと思います。

司会 ●では、第1部を終了いたします。ご質問などは、うしろでお受けしております。(了)

シリーズ
II

公益財団法人 京都市国際交流協会
連続フォーラム「チョゴリときもの」第22回
国籍—国籍を選ぶとき その背景にあるもの

民族とアイデンティティ

第2部 質疑応答

日時 ● 2015年3月20日(金)

場所 ● kokoka京都市国際交流会館

進行 ● 小倉紀蔵 京都大学大学院人間・環境学研究科教授

パネリスト ● 朴実(パク・シル) 日本籍、在日二世、音楽家

● キム・ファン 韓国籍、在日三世、絵本作家、児童文学作家

● 張寿榮(チャン・スヨン) 韓国籍、在日三世、学生

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● 第2部を開催いたします。いくつかのご質問とご感想をいただいておりますので、小倉先生、よろしくお願いします。

小倉 ● 貴重なご意見とご質問をいただきました。時間がありませんから、一つの質問に関してお三方それぞれのご意見をおききます。

最初のご質問は、日本人との結婚の問題についてです。「日本人と結婚して日本国籍を取得することによってアイデンティティはどう変わるのか。アイデンティティをどう守ってゆくのかについて、ご意見をおうかがいしたい」とのことです。

民族的アイデンティティとはなにか

朴(美) ● 日本政府はこれまで、帰化の条件として日本的氏名しか認めてこなかったのですが、国際化の流れで民族名を認めるようになりました。私が裁判で闘っていた当時、政府の高官は、「日本は単一民族的社会だ」と言っていたのです。それは嘘です。日本はこれからどんどん多民族社会になってゆくべきだと思うし、そのためには、それぞれのアイデンティティを尊重すべきです。われわれにとっては民族名です。世界のどこに行っても、金であり、李であり、朴である。かつて、モントリオール・オリンピックで、ソ連の体操の女子選手のネリー・キムが金(キム)と名のつて金メダルを取りました。

それからもう一つ、日本社会では、公務員になるにしても、国家公務員はとくにそうですが、国籍条項がまだあります。一般企業も、たとえば不動産業など、本名を名のれない商売がまだたくさんあります。そういうことが日本社会からなくならないかぎり、帰化は広がりません。同胞社会では、本名を名のれるところは本名でゆかないと、と思っっています。ですから、世代が代わって、日本籍を取る人たちが増えても、やはりコリアンネーム、民族名を大切にしてほしいなと私は思います。

キム●たいへん難しい問題です。私は日本の学校に行つて、自分は日本人だと思っっていましたから、「お前、朝鮮人だ」と言われたときのショックは普通ではなかった。私には子どもが3人いますが、子どもたちは朝鮮学校に行かせました。ただし、朝鮮学校にずっと行かせると視野が狭くなるのではないかと感じて、小学校だけ、あるいは中学校まで行かせて、あとは日本の学校に行かせた。中途半端な教育方針ですが、「中途半端のどこが悪いんや。中途半端だからこそ、できる仕事があるやないか」という生き方をしていますので。(笑)子どもたちが小さいときには、素直に「ルーツは朝鮮半島や」ということは教えようと努力しましたし、学校教育以外の家庭教育でそういう場を設けられるようにはしてきましたつもりです。娘3人は、幼稚園から韓国名で通っっていますし、いまま韓国名で就職して、問題はないみたいです。

張●「日本人との結婚にともなう帰化」とありましたが、私はまだ学生なので、結婚という考えにいたらない部分はあるのですが、日本人と結婚して、絶対に帰化しなくてはいけないというものではないと思うのです。帰化したからといって、私は日本人になるわけではありませんから。アイデンティティというもの考えると、本名で生きてゆくということもそうですが、私のアイデンティティは環境だと思っっています。

自分が育ってきた環境や歴史、父と母が守ってきたものを、理解して、しっかりと自分の考えをもって守ってゆくことが重要ではないかと……。地元で生きてきましたから、地元の社会を守ってゆくということが、私にとつてのアイデンティティではないかなと思っっています。

小倉 ● ありがとうございます。アイデンティティの問題は私自身もいろいろ考えるところがあるのですが、きょうは在日の方の話を聞く場ですので、私はお話を聞く側にまわりたいと思います。

二つめのご質問は、若干のご意見も含まれます。「朴さんは『朴』と名のるのに、なぜ日本国籍を取られたのか」ということです。それから、この質問と関係しているのかもしれないませんが、「韓国の方も日本にたいして差別があるように思いますが、この点についてはいかがでしょうか」というご質問です。

朴(美) ● 私が帰化した直接の動機は日本人との結婚です。妻の母親が自殺未遂をしたということはさきほど話しました。私はずっと通名しかなく、在日だということも、自分のアボジとオモニがなぜ日本にこざるをえなかったかということすらも、私はなにも知らなかったのです。日本の教育では、そういうことが教えられてこなかったのです。私が自分を取り戻そうと思ったきっかけとなったのは、子どもが生まれたときです。自分のルーツを調べたら、創始改名に行きあたった。自分の戸籍名の「新井」はいついたいどこからきたのかということを知ったときに、私はこんな名前を子どもたちに継がせたくなかったです。それには、自分で「朴」を名のり、子どもたちにも「朴」を名のりてもらうことだと思って、子どもたちといっしょに生きてきました。妻は日本人なので、いったんはもとの日本名に戻しました。でも、のちになって、娘が本名のことで小学校でいじめられたときに、「お母さんみたいに日本の名前をつけてほしい」とねだったことが

あつて、妻も、下の名前は日本の名前ですが、姓を朴と名のつて生きてきました。

二つめの質問ですが、たしかに朝鮮人も日本を見下げた言い方をする場合があります。「歴史的にも自分たちのほうが先輩である、兄貴分である」と。でも、それも含めて、人間としてだけかを差別をしてよいのかということです。「同じように差別をしているじゃないか」という見方よりも、絶対的なものとしてとらえなければいけない。以前、どこかの市長が、「どこの国も従軍慰安婦みたいなことをやってきたじゃないか、日本だけが悪いんか」と言われましたが、そうではなくて、「悪いことは悪い」、「差別することは悪い」と私は認識しています。そういう普遍的な価値観で生きてゆきたいと思っています。

小倉 ● ありがとうございます。この点について、朴実さん以外の方もお答えをいただけますか。

キム ● 私は仕事で年に3、4回くらい韓国に行きますので、これまでに30回くらい行っています。韓国も私たちにたいして差別しますよ。国籍は韓国人だといっても、差別がないわけではない。私がよくいわれるのは、「キム・ファンは日本に住んでいるのに、韓国の自然について書くな」、「韓国でも絵本を出すなら韓国に住め」です。面と向かって言われたことが2回ほどあります。「なにくそ」と思っておりますが、そういう韓国を変えたいという思いでがんばってきました。

それでも、韓国にしょっちゅう行って、このごろよく感じることは、外国人の増加です。日本では外国人の観光客が一千万人を超えたといっていますが、じつは、韓国は日本よりも先に超えているのです。外国人労働者もそうとう来ています。日本に住んでいる外国人は200万人ですが、韓国では日本の倍の速度で外国人が増えています。そのぶん問題も多いのですが、多文化共生に向けて、積極的に市民が、そして国家

が取り組んでいるのです。問題はたくさんありますが、「私は必要とされているんだな」という実感があります。日本や韓国で仕事をもちょうと、「どちらが私をたいせつにしてくれるのかな。私の情報、私の力」と思っている……。いまは韓国のほうが私を高く評価してくれているようなので、韓国からの仕事が多くなっています。選んでいるわけではないのですよ。「多文化共生をつくりたい」と求められれば、私はどこでも行くのです。でも、いまの日本は、そっちの方向には向かってないと思うことがあります。

何回も言います。韓国も差別が多いです。めちゃくちゃあります。けれども、社会がそれを許さないと、いう方向では一致しています。ヘイト・スピーチなんかありえない雰囲気にはなっています。

張●韓国の方は日本人を差別するということですが、私はまだ韓国にも行ったことがなく、韓国人の知り合いもいなくて、基本的に知り合いは在日の方なので、差別があるかということはよくわかりません。でも、在日の方が日本人の方にたいして差別している部分もあるのではないかと、私はうなずけます。歴史では、やはり在日というものは被害者であると思います。だからといって、日本人の方にたいしてないかということが正しいことではないので、それを私は差別だとは思っています。

韓流ブームと嫌韓ムードと在日文化

小倉●ありがとうございます。差別という問題はかんたんな問題ではないですね。心理も含まれているから……。この問題もいずれ、集中的に議論をしたいと思うのですが、きょうは次の質問に移ります。

「『冬のソナタ』以降、韓国文化への熱狂が日本のなかにありました。ところがいまは、クラッシュ的な嫌韓ムードがあります」。張さんは10年まえのことを覚えてらっしゃるかどうかわからないですが、朴さんとキムさんはその両方を体験されていますよね。つまり、「韓国の文化を高く評価するという日本人の感情と、いまの嫌韓ムード。この両方を体験されての心情をお聞きしたい」という質問です。最近では、在特会（在日特権を許さない市民の会）のヘイト・スピーチなどありますが、そういうことも含めて、韓国にたいする極端な心情の変化が日本人のなかにある。これをどう捉えていらっしゃるでしょうか。

朴(美) ●韓流ブームはたしかになかなかよかつたなと思うのですが、韓流ブームのなかでは、在日のことはなんらふれられていない。私も一時期、衛星テレビを契約して、韓国の時代劇にはまったりしました。あれは見だしたら止まらないですよ。どうしても次が見たくなくて……。笑でもそれは一つの娯楽であって、在日のことを知るきっかけにはならないと思うのです。

私が生肖的なのは、ヘイト・スピーチです。私たちが住んでいる東九条に在特会などが4回も来たのです。チョソンハッキョ（朝鮮学校）にかかわることは3回といわれていますが、最初に来たのは5年まえの12月で、朝鮮学校、幼稚園、小学校です。2回めもそうです。3回めは、在日一世のデイサービスをしているエルファです。4回めは、東九条の中心にある、保育園と児童館の隣の児童公園です。われわれは連日ビラを配って、「やつらの挑発にのるな」と呼びかけたのですが、「ゴキブリ」、「ウジムシ」、「チョーセン帰れ」、「ゴミはゴミ箱へ」、「スパイ学校」と言われたりして、小さい子どもたちが泣き出すのです。それを1時間以上にわたってやる。20歳前後の子らは、興奮して殴りかかって……。われわれはそれを羽交

い絞めて止めて、半分泣きながら……。それをいっしょにやってくれたのが地域の児童館の先生だった
り、保育園の先生だったり……。地域でいっしょに活動している「東九条マダン」の日本の若い人たちもいっ
しょになって、在特会の彼らに「やめろ、やめろ」と言って、子どもたちを守ってくれた。これが私たちの
現実なんです。小さいときからいっしょに地域で生きている、その姿を大切に育ててゆきたいと思っていま
す。ただ残念なことに、在特会の言いぶんをたいして、「あいつらもやりすぎやで。でも、やられるほうも
やられるほうやで」、「どっちもどっちや」という地域の連中らがいたこともたしかです。そういう人たちと
もいっしょに生きている、その現実があるということをつくづく知らされました。

小倉 ● ありがとうございます。

キム ● 韓流ブームは、期待していなかったのに、とつぜん降って湧いたようなもので……。ですから「嫌韓
ムード」といわれても、正直なところ私たちは「もとに戻っただけ」という感覚です。でも、韓流ブームだっ
たころのようになってくれればよいなとは思っています。韓国の文化に興味をもって、理解しようとして
いる人たちが増えたことは事実で、うれしく思っております。「もとに戻っただけ」と言いましたが、そのマ
イナスが大きくなるようにという思いで、創作活動をしています。

『サクラ』という本で、「子どものための感動ノンフィクション大賞 最優秀作品賞」をいただきました。韓
流ブームが終わりをかける2007年に出た本なのですが、日本から韓国に貰われていったサクラという名
前のゾウの話です。じっさいに、宝塚ファミリーランドにサクラちゃんというゾウがいて、ソウルの動物園
に貰われていったのです。サクラという名前だから韓国でいじめらへんかなと、心配でたしかめにいったら、

幸せに暮らしていたという、それだけのストーリーです。けれどもその背景として、かつて韓国では、反日活動の一環として、「桜の伐採運動があったんだよ」とか、「昌慶宮(チャンギョングン)という、王様が住んでいたところが動物園になったんやで」、「天皇さんが住んでいるところが動物園になったら、あなたたちはどのくらい傷つく?」ということをし、子どもたちにもわかるように書いた本なのです。この本を書いた理由は、「韓流ブームもええけど、もう少しおたがいに心情をわかるうやないか」ということです。いまになって、「キム・ファンさん、あの本はよかった。あの本を読んでから韓国に行ったらよかったわ」と言われるのですが、「もっと早めに買ってくれ」と。(笑)

私が朝鮮学校にいたのは、もう20年も30年もまえの話ですから、いまもそうだと決めつけないでくださいよ。少し慎重にことばを選びたいのですが、朝鮮学校では、「お前、そんなことをしていたら、日本人になるぞ」という教育をたしかに受けました。先生たちは日本を否定することによって朝鮮人だという認識をもたせようとしていたのです。「否定による肯定」です。わかりますよね。元教師ですから、ついついこういう言い方をしますが、「否定による肯定」です。いまの日本人の方たちは、韓国を否定することによって日本を肯定している。私たちが20年まえ、30年まえに、「そんな教育があるか」と思っていた教育がなされるような雰囲気があります。よいことをしたら誉めて育てたい。「肯定による肯定」が行なわれるように願っています。

張●韓流ブームは、私が小学生のころで、私も韓流ブームにのっていました。『宮廷女官チャングムの誓い』も見ましたし、中学生のころは「KARA」や「少女時代」にはまって、カラオケでよく歌っていました。

でも、中学生のとき、私の母校の小学校、京都朝鮮第一初級学校が在特会のヘイト・スピーチを受けました。私には弟や妹がいないのですが、友だちの弟は日本の学校に通っていて、その学校でヘイト・スピーチを受けました。ヘイト・スピーチの問題は、いまは表ざたになって、嫌韓ムードというものが出ているだけで、そういう問題はずっと、韓流ブームの当時間も同時進行であったのだと思います。

韓流ブームのように韓国から流れてきたものと、在日の文化というものは、また違うんじゃないかなというのが私の意見です。私は日本で生まれ育ったので、韓流ブームは蚊帳の外というか、自分の国から来たというイメージがあまりないです。でも、在日というものは、私たちの社会の問題です。私は日本人としての感覚のほうが強いのだと思いますが、そういう意識があるのだろうと思います。

韓流ブームで問いなおした民族主義

小倉 ● なかなか複雑ですよ。

次の質問は、いまの質問と似ていて、最後に張さんが言うてくださったことが、次の質問の答えになっているのですが、韓国文化の話、韓流の話です。「数年まえに日本で韓国ドラマなどのポップ・カルチャーが流行し、韓国やコリアンのイメージを変えたような印象があります。そういったイメージは、なんらかの私たちでアイデンティティに影響を与えることはありませんか」。

みなさんのアイデンティティの問題ですね。日本人が韓国文化を好きになったということで、アイデンティ

ティに影響があったかということです。いまの張さんのお話は、この質問に答えてくれたようなかたちで、アイデンティティの変化はなかったという話ですよ。少し世代の違う朴実さんとキム・ファンさんはいかがでしょうか。

朴(美) ● 民族主義というものは少し危険だと思って、私はいつも警戒しています。韓流ブームのときに、時代劇ドラマで高句麗や高麗などを必要以上に美化する傾向にあるのを知って、これは危ないなと……。あまり夢中になりすぎると、自分が民族主義者になるのではないかと思うくらい、影響を受けたことがあります。小倉 ● なるほど。韓国でつくられる作品が民族主義的だということ、そこは一線を画したいということですね。

キム ● 私は反対の意見ですね。韓流ブームで、「これが私たちのルーツのほんものの文化なんだな」という思いをたいへん享受しました。朝鮮学校で学びましたが、「朝鮮学校で学んでいたことは、純粹な民族教育とは違ったんだな」と思いました。私たちは、1970年、1980年代の朝鮮学校に通った人間で、「社会主義祖国はすばらしい一辺倒」の時代だったのです。民族教育といいながら、歴代の朝鮮王朝の王様の名前も教えてくれない、そんな教育を受けていました。ですから、韓流ブームはとても新鮮でした。このドラマや映画を日本人が享受して、同じように喜んでくれているということ、「わかってきているんだ」ということが、日本人にたいしてぜんぜん期待していなかっただけに私はとてもうれしかったです。

朴(美) ● 民族主義をすべて否定しているわけではないのです。民族主義はもろ刃の剣みたいなもので、強大な帝国主義と闘うとき、民族主義というものはそれに抵抗するための強力な武器にもなりうる。いっぽう

で、いまの韓国はODA(政府開発援助)の援助国として世界で評価されるような国になって、経済的にあるていどの規模になってくると、その民族主義はマイナスに働く面もある。その両方を警戒しないといけない。韓流ブームのテレビドラマは私もはまって、たしかにおもしろかったのですが、自分の反応を分析しながら、「これは危ないな」と思ったのです。

小倉 ● ささほど張さんもおっしゃいましたが、韓流ブームが終わって、嫌韓ムードになったということではないと私も思います。あの時代に、日本人の多くが韓国文化に魅力を感じたその気持ちは、いまでも強く思っています。ただし、いまはそれが表面に出てこなくて、嫌韓ムードのほうに……。日本の政権が政権だから、そっこのほうが目だっているだけだと思います。

日本社会は在日への差別にどう向き合えばよいか

小倉 ● 次のご質問は、とくにキム・ファンさんへのご質問かもしれませんが、みなさんにもお答えしていただきたい。第一部でキム・ファンさんから、日本国籍に切り替えるときには、「気持ちよく」切り替えたいというお話がありましたよね。それを妨げるものに、差別以外になにかあるか。差別しかないということだと思います。そのことをふまえたうえで、「在日の方が気持ちよく日本国籍に変更するために、日本社会、あるいはわれわれ日本人が、この問題にどのように向きあってゆけばよいか」という、かなり本質的なご質問です。まずキム・ファンさんからお答えいただけますか。

キム●ざっくりと言いますと、ようは歴史認識だと思うのです。「あれは侵略じゃない。自衛のためのものだった」ということではなくて、過去にたいする真摯な反省に立って、「いやいや、なにをおっしゃる。私たちも日本からいろいろと学びました」という具合になればいいと思っただけなんです。ところが、そうならない流れになってきています。そこが辛いなと思っただけです。「気持ちよい」という状況をうまく表現できないですが、私たちが日本にもつている過去の歴史にたいする思いと、日本人が抱えている思いとが、すり合わなくなってしまうようにしてほしいと思っただけです。

朴(美)●究極のところ、そういう差別がなくなり、おたがいに認めあつて、尊重しあう社会になれば、わざわざ帰化する必要はないと思うのですが、さきほども言いましたように、就職のさいのさまざまな国籍条項や社会にある差別、そのほかいろんな条件がまだにある。キムさんは、歴史認識といわれましたが、私自身も日本の学校しか出ていないのでつくづく思います。凝り固まった教育のなかでは、なかなかそれではできないと思います。在日にかぎらず、社会全体の差別がなくなつてはじめて、帰化などの問題もなくなると思うのですが、それはまだまだ先のことでしょうね。

小倉●ありがとうございます。

次はご質問ではなく、ご意見ですが、「国籍がどうあるとも、おたがいを認めあう社会、そういうものをめざしたいです」とのことです。この方は在日コリアンの方で、国籍について悩んでいるようで、きょうは在日コリアンの方がたのご意見をお聞きすることができてよかったということです。これは、「日本が単一民族国家である」といはいはじめたのは、つい戦後である」ことをわれわれが想起して、いわゆる日本人だけが

日本をつくっているわけではないという原点に立ち戻ればよい話ですよね。

ベルリンには、ベルリン・ユダヤ博物館というものがあります。私はそこを訪ねて、ほんとうによい博物館だと思いました。日本にも東京の麻布に、在日本大韓国民団系の在日韓人歴史資料館があります。それをつくった方がたの志はひじょうに高いのですが、そこでは、虐げられた悲惨な歴史だけが展示されていて、残念ながら若い人はそこに行きたがらない。

私はドイツは歴史の清算をきちんとして、日本はやっていないという考え方にはくみしないのです。これは間違いだと思います。ユダヤ人のホロコーストと、日本のしたことを同じに論じるということは完全に間違っています。ただし、現代のドイツ人がしていることのすばらしさというものがある。ベルリン・ユダヤ博物館の最初の部屋になにがあるかというところ、数学の展示があるのです。数学には、ユダヤ人が築き上げた数学的な世界観というものがあるのです。そこでドイツ人の中学生、高校生が一所懸命に勉強している。ユダヤ的な数学の世界観を勉強して、討論している。次の部屋に行くと、「ベルリンという都市は、ユダヤ人なしには、これほど豊かな素晴らしい都市にはなれなかった」というテーマで、ユダヤ人の建築家や芸術家、小説家たちのことをこと細かに展示しているのです。たとえば、ユダヤ系の小説家がベルリンをどう描いたかなどが展示してあって、そこでまたドイツ人の中学生、高校生が一所懸命に勉強して、議論している。そういう部屋がいくつもあって、ホロコーストのことは最後に出てくる。これは一種の誘導だとは思いますが、「ユダヤ人の世界観はすごいんだな」、「ユダヤ人とともにドイツは発展してきたんだ」、「ユダヤ人がいなかったら、ドイツはこんなに発展できなかったんだ」ということがあって、最後にホロコースト

があるから、「なぜなの」、「なぜ、この人たちを抹殺しようとしたの」という思いが自然に湧いてきますよね。つまり、虐げられるべき理由がないのに、虐げられてしまったということです。声高に叫ぶのでなくて、その人たちのもっている世界観、文化、思想、そういうものの重要性、「どうして、この人たちといっしょにやってきたドイツ人が、とつぜんこの人たちを排除することになったのか」ということが一人ひとりの心にグサツと突きつけられるような展示をしています。日本ももう少しおとなになって、一人ひとりに考えさせるような社会になってゆかないといけないなと、ベルリンで思いました。

もう一つ、ご意見です。「日本人が朝鮮人を差別するのは、植民地支配の所産であります。日本人のメンタリテイは戦前も戦後も変わっていません。私は在日二世。妻が日本人で、韓国籍を選択しました。国籍がどうのこうのというまえに、日本社会が差別をなくさないといけません」ということです。それは完全にそうなのです。「どうしたら、差別をなくすことができるのか」を、われわれはもう少しおとなになって考えないといけない。

だんだん時間が迫ってきました。ほかに木実さんに、「ソウルオリンピックの大会で歌われた、金蓮子（キム・ヨンジャ）さんの『朝の国から』という歌は、いまでも歌われていますか」といったご質問もありました。（笑）国籍の問題と関係ありませんが、先ほど確認したら、「歌っていない」ということのようにです。

残念ながら時間がきました。きょうはデイスカッションの時間が短かったですね。5時間くらいお話ができればよかったです。みなさんは、この3人の方がたがどういうことを考えて、この京都という場所で生きてこられたかということ垣間みることができたと思います。

このフォーラムは来週の金曜日、27日の同じ時間につづきます。張さんはきょうだけのご出演ですが、キム・ファンさんと朴実さんは、来週もこのつづきをお話ししてくださいます。みなさん、きょうは金曜日の午後のひととき、お時間を割いてくださいます、ありがとうございます。

司会 ● 本日はありがとうございました。一日めはこれにて終了させていただきます。次週、同じ時刻にこの会場で二日めを開催いたします。お二人は引きつづきご参加で、張さまはお友だちの方と交替していただきます。パネリストのみなさま、進行の小倉先生、どうもありがとうございました。(了)

シリーズ
II

公益財団法人 京都市国際交流協会
連続フォーラム「チョゴリときもの」第22回

国籍—国籍を選ぶとき その背景にあるもの

在日社会と日本社会の変化と関係性

第1部 パネルディスカッション

日時 ● 2014年3月27日(金)

場所 ● kokoka京都市国際交流会館

進行 ● 小倉紀蔵 京都大学大学院 人間・環境学 研究科 教授

パネリスト ● 朴実(パク・シル) 日本籍、在日二世、音楽家

● キム・ファン 韓国籍、在日三世、絵本作家、児童文学作家

● 朴玲華(パク・リョンファ) 韓国籍、在日四世、学生

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● ただいまより、連続フォーラム「チョゴリときもの」第22回の二日目を開催いたします。

このフォーラムは、日本社会のなかの在日コリアンという存在に焦点をあて、これまでその思いや意見を語る機会のなかった在日一世の方から直接にお話をうかがうことからはじまりました。聞く者もいっしょに考えることにより、みなが住みやすい日本にしたい、そういう思いで開始しました。

第22回を数えます今回は、「国籍」をテーマに「国籍を選ぶとき、その背景にあるもの」と題し、パネルディスカッションを中心とする形式で二日にわたり開催しております。先週に実施した一日めは、「民族とアイデンティティ」という視点で語り合いました。二日めの本日は、「在日社会と日本社会の変化の関係性」という視点で進めてまいりたいと思います。

本日は、前回に引きつづきご参加いただいている方も大勢いらっしゃいますが、本日はじめてという方もいらっしゃいますので、議論の前提となるお話をさせていただきます。

現在、在日コリアンの国籍は韓国籍、朝鮮籍、日本籍の3種類があります。朝鮮籍は、厳密には日本では国籍と認められておりませんが、まず3種類あることを前提にいたします。次に多くの方が誤解しておられるのですが、朝鮮籍≠北朝鮮、あるいは北朝鮮人ではありません。この点を前提として、話を進めてゆきたいと思います(5ページ参照)。

本日の第一部は、パネルディスカッションです。約15分間の休憩を挟み、第二部はみなさんからのご質問、ご意見をもとに、質疑応答の形式で進めます。第一部の終了後の休憩時間に、お配りしております質問票を回収させていただき、第二部につなげたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願い致します。

それでは、パネリストの方をご紹介します。前回につづいてご参加の、朴実さまは、長らく学校における音楽教育に携わっていらっしやいました。同じく、前回につづきましてキム・ファンさまは、生きものを扱った絵本を日本や韓国で出版されています。三人めのパネリストは、朴玲華さまです。朴玲華さまは現在、美術系の大学に在籍され、この春から2回生になられます。先日、この会館の展示室で開催した『京都中高美術部&OG展 ラポール展』にOBとして出品されました。そして、進行役は前回にひきつづき、京都大学教授の小倉紀蔵先生です。それでは先生、さっそくよろしくお願いいたします。

小倉 ● みなさん、こんにちは。先週もご参加くださった方が全員いらっしやっているわけではなくて、10人くらいの方はきょうはじめてということですが、先週の話をくり返すと時間の無駄ですから、申しわけありませんが、先週のお話は先週でいちおう終わって、きょうはそのつづきということにいたします。

在日の歴史を知ったうえでも、差別意識はなくなるのか

小倉 ● 前回の休憩時間にいただいたご質問やご意見は、すべて紹介したのですが、お帰りになるときにいただいた質問は紹介する時間がありませんでした。みなさんがせっかくお書きになってくださったので、ディスカッションのまえにご紹介したいと思います。

「このような歴史について、あまりにも知らないことが多く、『なぜ?』と思うことが多かったので参加

しました。興味深く、驚きや感動がありました。張さんが話されたように、『幸せになってくれるのなら……』がいちばんだいじだと思いました」。張さんというのは、前回のフォーラムのパネリストとして参加された大学生の女性の方です（31ページ参照）。どんな人も、「自分らしく生きる」ことを追及する、その権利を剥奪されることはあり得ないことです。

「日本人も韓国人も中国人も余裕がなくなっている。大きな気持ちもなくなっている。おたがいの罵り合いになっていく。どちらかがやめないと永遠の対立になってしまふ」。たしかに余裕がなくなっています。日本社会にとくに余裕がなくなっているように感じます。なにしろ二十数年間、日本社会はあまり経済成長していない。そういう意味でも余裕がなくなっているのかもしれない。

「知らないことばかりなので、なんでも知りたいたいです。体験談、ご苦労話、差別問題など……。日本人が気づいていないことなどを教えていただきたく思います」。まずは事実を知ることが大切だと思います。たとえば大学で私が国籍についての講義をするときには、いろんな理屈を言うわけですが、そのままに、まずはどういふ体験をされてきたのかを知ることが大切だと思います。

「日本社会は」在日韓国・朝鮮人を受け入れる社会にはなっていないように思う。たとえば、京都市では、在日外国人が受験できる職種が限定されています。法的にしかたがないのかもしれないかもしれませんが、100年が経過して、まだ差別がなくなっていない。これは年数がもたらすものなのか。つまり、100年という時間ではまだ足りないのか。150年、170年たつと差別はなくなるのか。それとも学校教育がうまくいっていないせいなのか。それとも歴史を知った日本人が蔑視しているのか」。



これは少しおもしろい考えですね。在日の方がいらっしゃってから、だいたい100年です。20年くらいまえには、「日本人が韓国や朝鮮の人たちを蔑視するのは、歴史を知らないからだ」という考え方が多かったのですが、この方はそうではなくて、「歴史を知った日本人が蔑視をしているのではないか」と考えていらっしゃるようです。さらにつづきます。「しかし、10代は歴史を知っても、差別をすることにはつなげていない。全体的にいうと、確実に差別は減っているとも考えている」。私は、この方のご提言がグサツとききました。この方のお子さまは10代です。

「在日の人たちに対する日本社会の差別意識がまだにつづいていることに怒りを覚えます。アメリカに従属し、中国や朝鮮半島を見下す、現在の安倍(晋三)政権や右傾化する状況に危惧を覚えます」。アメリカに精神的に従属しているから、中国や朝鮮半島をバカにしているのだという話です。

「(在日の人ための)結婚相談所にくる帰化した人たちは、日本人との見合いを拒否されているという話で、日本国籍であっても受け入れられないということを考えさせられました。私は戦後に生まれた日本人ですが、日本国がアジア・太平洋地域を侵略した歴史に対して責任を感じています。歴史は現在を否定していると思います。いまの日本国籍の日本国民が過去の歴史を無視するだけでなく、改ざんしつつあることを危惧しています。天皇を絶対視する明治以降の公民教育が日本を歪めたのだと思います。日本軍がアメリカ人の捕虜を虐待した映画が日本人の反対のために上映できないとか、『八紘一字という思想だ』と国会で発言

する議員がいてもあまり批判されない日本社会の現状は、戦後民主主義の末期的状況を呈していると思います」。これは、一つの論文になっていますね。ご自分のご意見をはつきりとお書きくださいました。前回いらっしやった張さんのお父さんが、在日の方を対象とする結婚相談所のようなことをやっていらっしやるということでした。

「キム・ファンさんの本を買いたくなりました。20年まえの韓国がいまの日本と似ているということばに共感できます。いまの日本人は、韓国の人たちがいまだに日本を嫌っていると思っているかもしれませんが、むかしほどの反日というものはありません。そのことをキム・ファンさんが正確におっしゃってくださった」。

このご意見をくださったのは韓国の方だと思います。いまの韓国の社会的雰囲気はそうではないということですが、韓国社会では、「どのように多文化社会をつくってゆくか」という取り組みに熱心なのですが、そのことはあとでキム・ファンさんにご紹介いただきます。さらにこの方は、「在日韓国人についてはよく知らないのですが、日本社会に1年半暮らしただけでも、たいへんことがたくさんありました。それなのに、朝鮮や韓国というアイデンティティを失わずに数十年生きている人たちがいることに、尊敬心を抱きます」。最後にもう一つ、ご紹介します。「希望を込めて、人権を明るく表現できるような講演などができれば、広く伝えられると思います。つまり、人権を明るく表現できるポップ・カルチャーや島田洋七さんの講演など（中略）。人権は暗いテーマです。その立場にある人や関係する人でないと、なかなか理解できないと思います。だけど、それを明るく伝えてください」とのことでした。

韓国社会で薄らぐ反日感情と増える外国人

小倉 ● 前回にみなさんが書いてくださったご意見の紹介はこれくらいにして、きょうは2時間たっぷりディスカッションしたいと思います。前は、おもにパネリストの3人がどのように生きてこられたか、民族性、国籍をどのように考え、どのように選択してきたかをお話いただきました。きょうはもう少し広げて、「日本社会はどのようになればいいのか」ということを視野に入れながら、在日の人たちの「よりよい共生のあり方」について考えてみたいと思います。

前回、朴実さんは、「自分は朝鮮系日本人という気持ちはなくて、日本籍朝鮮人（日本国籍を取得した朝鮮人）というアイデンティティをもっている」ということをおっしゃいました。さらに理想の未来として、「日本国籍を取った在日であつても、在日同胞から見下されないような社会、すべての人が自分の選択に関して、だれからも見下されない社会がよい」という話をされました。私はこの二つがすごく印象に残っています。

キム・ファンさんのお話は、きょうの話とつながってくるように思います。「たとえば私が今後、日本国籍を取るという選択をするかもしれない。そのときに日本社会がハードルを低くして、『気持ちよく』日本社会に入つてゆけるようになってほしい。そうなれば、自分の心のハードルも低くして、日本社会に入つてゆける。日本国籍を取ることができる」ということだったと思います。

「気持ちよく」とはどういうことなのかを、きょうはみなさんといっしょに考えたいと思います。「在日の人たちがこの社会の一員として、どうすれば『気持ちよく』生きてゆけるのか」。それは日本社会側の問題で

す。このことも考えてみたいと思います。

ということ、まずはキム・ファンさんから話題を提供いただいて、それを巡って議論するという流れにしたいと思います。キム・ファンさん、どうぞよろしくお願いします。

キム●今回、はじめて私の話を聞く方もいらっしゃるかと思いますが、私は子ども向けの絵本などを書いており、児童文学作家です。日本から韓国に渡ったゾウの物語『サクラ』という児童文学を学習研究社から出版し、「子どものための感動ノンフィクション大賞 最優秀作品賞」をいただき、メジャーデビューいたしました。

この『サクラ』という本についてお話しします。かつての韓国では、日本との関係が悪化するとすぐに日本の象徴でもある桜の伐採運動が起こって、たいへんだったのです。「サクラ」というのは宝塚ファミリーランドにいたゾウさんです。引き取り手がなくて、しかたなく韓国に行ったのですが、「サクラという、日本を象徴する名前のゾウが韓国に行つて、大丈夫だろうか、だいにされるの？」という疑問からはじまって、「これまで、日本と韓国とのあいだで、いろんなことがあったんだよ」ということをわかりやすく伝える本です。ここに置いておきますので、興味がある人は休憩時間にも見てください。

うちはカフェをしています。嫁はもとともスーパーのパートのレジのおばちゃんでした。きのう、パート勤めのときの同僚がいっぱいカフェに集まって、みんなでペチャクチャしゃべって、食べて、楽しんだのですが、そのときに、「韓国に行きたいな。きょう食べた韓国料理もおいしかったし……」という話になりました。でもいっぽうで、「テレビを見たら、反日運動でワーワーと騒いで、日本の国旗は破られるし、怖くて

よう行けへんわ」と言うのです。「そんなことありませんよ。そんなんは一部の人で、ぜんぜん違うよ」ということで、「これ見て！」と紹介したのがこの絵本です。

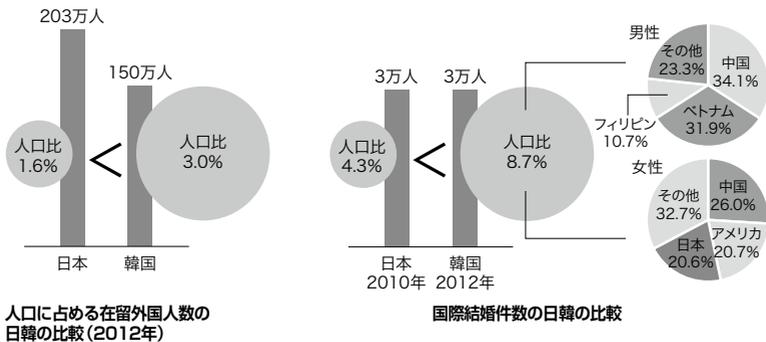
みなさんもぜひ、これを見てください。表紙のどまん中に日本の下駄が描かれています。木の靴はオランダです。これはロデオをするアメリカの人たち。これはコッシンという花靴で、韓国の靴です。靴を見ながら、世界の民族を知ろうという絵本です。日本の方には悪いのですが、日本のことを悪く言うときによく、「チョッパリ」と言ったものです。「チョッパリ」は獣の足のことです。下駄をはくときに親指と人差し指をひらいて足を入れる、そのかたちが獣の蹄つづめみみたいだということ……。だから、私たちは下駄を履かなかつたし、草履のような鼻緒のついたサンダルも履かなかつたのです。ところが、いまの韓国の芸能人はサンダルを好んで履いています。女の子たちも繁華街でサンダルを履いています。この下駄が絵本のどまん中に描かれていて、日本の文化の一つとして紹介されるくらいに、下駄への抵抗はもうありませんし、反日デモなんてありません。



兵庫県北部の豊岡市に「コウノトリの郷公園」があります。日本ではいちど絶滅してしまった野生のコウノトリを人工飼育で増やして、ふたたび自然に帰す取り組みをしています。そこに、韓国からの観光客をたくさん呼びこみたいということで豊岡市にたのまれて、先々月、モニターツアーを実施したのです。韓国の人たちをたくさん招いて、城崎温泉に入ってもらって、コウノトリの郷公園にも行くというプランです。でも、

そのときは大雪でたいへんでしたので、浴衣を着て城崎温泉の「七つの外湯めぐり」をする予定でしたが、風邪をひかないようにと配慮して、浴衣を着るのをやめたんです。そうしたら、それが女性陣にはものすごく不評で、「浴衣を着たかったのに」と。私たちの時代は、「着物を着る」というだけで反逆者、民族の裏切者の扱いでした。そうですよ、朴さん。ところが、30代、40代の韓国人の彼女たちは、「着物を着たかった」と言うのですから、それくらい変わってきているのです。その背景について、きょうは時間が許すかぎりお話ししたいと思います。この靴の本も置いておきます。

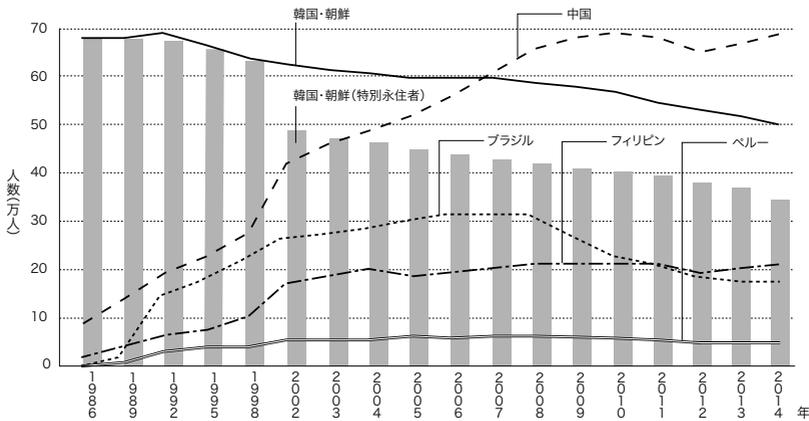
ここにもう一冊、いま韓国でいちばん売れていて、問題提起をしている本があります。『カメソ アントウオ?』というタイトルで、直訳すると、「黒いから、暑くない?」という意味です。三つの話が載っているのですが、表紙に描かれている少年の話は、フィリピンからきた男の子が主人公です。韓国籍を取って、韓国語もペラペラしゃべれるのですが、肌の色が黒いので、「おまえ黒いから、暑くないだろう」と友だちから言われてしまふ。これは差別です。韓国には、多くの国から外国人労働者がやってきます。モンゴル人は多いですし、中国人やフィリピン人、ベトナム人



韓国は日本の倍も外国人が暮らし、ますます増える傾向。日本は2009年をピークに減少している

も多いです。こういうアジアの国ぐにからやってきた外国人労働者やその子どもにたいして、ひどい差別をしている。これについてみんなで考えましようという本です。なぜこの本が教育の現場で読まれ、ベスト・セラーになるのか。

みなさんにお渡しした資料を見てください(58ページ)。韓国の人口はだいたい4千万です。日本の人口を1億2千万とする、韓国の人口は日本の3分の1なのに、在留外国人の数は人口比で考えると日本の倍です。国際結婚の比率も日本の倍です。日本では2009年をピークに、日本に暮らす外国人の数がどんどん減っています。かつては私たちは、「60万の同胞」と言ったのですが、現在は韓国籍・朝鮮籍は約50万人しかいないようです。しかも、ニュー・カマーがたくさん来ていますから、いわゆる私たちのような在日は、35万人くらいしかいないみたいです。定住外国人の割合がどんどん減っている日本にくらべて、韓国はどんどん外国人が増えていきます。外国人労働者に単純労働をさせるために受け入れたのですが、そのあと彼らが定着して、たいへんなことが起こっている。



日本の在留外国人(登録外国人)数の推移(毎年末現在)

参考資料 法務省 在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表

「なんとか、外国人といっしょにやってゆこう」ということで、そのスローガンが「多文化社会」です。外国から韓国に来て定住した人たちのことを「多文化」と言っています。そういう人たちが通える図書館をつくったり、活躍する場をつくったり……。でも、韓国の人たちは子どもを産みませんから、韓国人の人口は減っています。移民は許していませんが、外国人はどんどん入ってくるので、韓国の人口に占める外国人の割合は増えています。「移民政策はとらない。単純労働も許さない」というのが日本。それでも、日本政府は日系ブラジル人にたいしては、「日系三世まではどんな職種でも大丈夫」としたので、相当数のブラジル人が入ってきました。でも、アジアと南米とは文化が違いすぎるので、たいへん大きな問題が起こっています。学校に通えなくなったブラジル人の子どもたちのために、自分たちで学校をつくっています。数年まえまでは、80から100校くらいあったそうです。かつて、日本でいちばん多い外国人の学校は朝鮮学校で、150校ほどあったのですが、いまは80校くらいしかありません。きょうは、外国人対策について話をする場ではないので、これ以上は発言はしませんが……。

安い労働力として企業が外国人を受け入れるなど、問題はたくさんあるのですが、韓国ではとにかく、「外国人といっしょに生きてゆくんだ」という方向で、大きく社会が動いています。「お試し期間」のようなものです。いっぽう、日本はどうなのかというと、「観光客が一千万人を超えました」と言いますが、とうに韓国は超えている。日本には観光客はたくさん来るのですが、定住する外国人はだんだん減っている。

先々週、韓国語学校を運営しているニュー・カマーの知人が相談にきて、「最近、生徒が入りません」と嘆いていました。最近もまた一人、訪ねてきまして、「日本の会社に就職しようと思ってがんばってきました

たが、あきらめます。そろそろ韓国に帰ります」と。私たちが在日はむかしから苦勞してきていますから、「こんなものかな」という思いがあるのですが、ニュー・カマーの人たちは、「日本はいまそうとう内向きになっている」と感じているようです。では、具体的にどうしたらよいかということ、朴実先生が実践されています。詳しくはあとで話をお聞きするとして、現実として、こういう状況があることを問題提起したいと思います。

互いの背景を認めあう場としての「東九条マダン」

小倉 ● ありがとうございます。大韓民国はいま、「多文化共生」ということで、私のことばでいうと、「大きな実験をしている」。これは成功するかどうかわからない実験ですが、果敢に挑戦している。日本は、2009年のリーマンショックのときから、在留外国人も少なくなっています。私感をはさんではいけないのですが、「日本には、多文化共生をするときの思想がない」というのがいちばんの確な診断である、私は考えています。逆にいえば、日本はこんなにも思想がないのに、行政はよくやってきたなと思うわけです。これほど思想がなくて、現場があたふたしてやってきたというのはめずらしいと思います。

韓国は若干の思想があります。若干です。だから、韓国も危なかしいのですが、少なくとも「ある思想」にもとづいて法律や条例をつくって、それにのっとって行政をするという流れはある。日本は、それがほとんどないという問題があります。これはのちほど、日本社会をどう変えてゆくかというテーマで、お話しし

たいと思います。

キム・ファンさんのお話をおうかがいして、朴実さん、いかがですか。東九条での実践もございますし、ひとことお願いいたします。

朴実 ● 朴実といます。紹介されましたように、私は日本籍です。四十数年まえに日本人と結婚するとき、相手の親が猛反対して、彼女の母親が自殺未遂をしました。そのときに、彼女の父親から「帰化してほしい」とお願いされたことが直接のきっかけです。帰化した朝鮮人、韓国籍あるいは朝鮮籍から日本籍に移った人は約40万人ちかくに達していますが、さまざまな理由があると思うのです。たとえば公務員になりたい、学校の教員になりたい、あるいは留学したいなど、いろんな理由があつて、日本籍を取らざるをえなかった人が多かったのです。最近は少し変わってきて、国際結婚によって日本籍に変わる人が増えています。私たちはこれをダブルとよんでいます。私の子どもは3人で、その子どもたちの子ども、孫は6人いますが、みんなダブルで、連れ合いは日本人です。韓国・朝鮮籍を含めて、いまの若いコリアンの約9割が日本人と結婚しています。1985年以降、国籍法は父母両系血統主義になりました。それまでは、日本の国籍は父親が日本国籍の場合しかもてなかったのですが、1985年以降、父母どちらかが日本人であれば、日本国籍をもてることになりました。実質は22歳までは二重国籍で、そのあとどちらかを選ばないといけないことになっていますが、日本政府は、そうやって生まれた子どもは日本人として統計に入れていますので、在日コリアンのなかで日本籍者はもともと多くなっています。でも、日本人の社会でも、あるいは在日の同胞の社会でも、こういう日本籍者はなかなか受け入れてもらえない。



朴玲華さんも在日四世ですが、私たちの身近には在日五世もたくさん生まれています。でも、それぞれ背景が違うのです。たとえば、自分のどちらかの親が韓国・朝鮮籍の人だったり、自分のおじいちゃん、おばちゃんがかリアン系だったり、育った環境も違う。そのなかでどういう地域社会をつくってゆくのかが課題です。私が生まれ育って、いまも住んでいる京都市南区の東九条は、ご存じの方も多いと思うのですが、京都市内でもっとも在日コリアンが多い地域です。以前は、韓国・朝鮮籍が約3割ちかくいましたが、いまは実質十数パーセントです。減った半分は、日本籍に切り替わっているのです。でも、地域を歩いて出会う人たちの顔を見ると、3割は在日コリアンです。

日本の社会においても、自分の本名を隠したり、あるいは自分の親のことを言えなかったり、あるいは同胞社会においても、自分が日本籍であることが言えなかったり……。そういう現状がずつつづいていたのです。これから生きてゆく若い世代にとつて、これはよくないと思います。落語の『寿限無』ではないですが、自分の親は、いっぽうは朴で、いっぽうは山本なら、「朴・山本」と名のるとか、あるいはその次の世代なら、名前が四つになるとか、自分のルーツを名前で表すなど、自分たちの育った環境をストレートに言えて、お互いに認めあえるような社会をつくってゆきたいという希望があります。

それを実践する場所として、「東九条マダン」を企画しました。朝鮮語の「マダン」は「広場」という意味です。日本も朝鮮も農耕民族ですから、春の田植えや秋の収穫のまえには大きな春祭りや秋祭りがあります。村

の広場にみんなが集まって、楽しむ。そういうことをイメージして、「東九条マダン」という祭りを始めました。東九条には、さまざまな背景をもった人たちが生活しています。在日コリアンには、日本籍者もいれば、韓国籍者もいれば、朝鮮籍者もいる。もちろん地域の日本人もいる。とくに、東九条には被差別部落出身の人も多く暮らしています。そういうなかで、みんなでいっしょに祭りをしようと、23年まえに呼びかけました。

でも、はじめはなかなかうまくゆきませんでした。地域の日本人たちは、「あれは朝鮮人がやっている祭りやから、自分たちとは関係ない」と。あるいはチョヨンハッキョ(朝鮮学校)に協力をお願いに行ったら、私を指して「同化主義者がやっている」。在日本大韓民国国民団にお願いに行ったら、「あれは総聯の人たちがやっている」という理由で、どこも協力してくれなかったのです。

でも若い人たちは、「これはおもしろいじゃないか」と、どんどん取り入れてくれました。近くに被差別部落があるから、部落産業と思われる和太鼓をどうしても取り入れたかったのですが、同胞にはなかなか受け入れられなくて、「自分たちの祭りやのに、なんで和太鼓なんかをやるのか」と言われました。でも、多くの若い人たちは、おもしろいじゃないかと、それも取り入れてくれました。

最初は、私たちのサムルノリと和太鼓とを別べつに演奏していました。第4回のころに、「セッションをやってみよう」ということになったのですが、はじめはお互いに遠慮があつて、ぎこちなかったのです。そうしたら、若い世代の人たちが物語をつくりだしたのです。私の妻の名前は「キヨコ」というのですが、「キヨコさんとはじめて会ったときはどうやった」と、私にきいてきたのです。「ええ格好をしようと思ってね

……」などと答えていたら、「それを音として、表現しよう」と。サムルノリをご存じかとは思いますが、たとえばチャンゴという楽器は、思いっきりええ格好をして、大きな音で、すばやく叩きます。いっぽう和太鼓は、上半身は裸になって、こちらもええ格好で叩くのです。どちらも主張が強いので、いっしょに演奏したら、聞いていられないですよ。(笑)でも、別べつにというのも寂しいから、「なんとかうまく合わせる方法はないやろうか」ということで、この楽器とこの楽器、この楽器とこの楽器というように、和太鼓とサムルノリの一つひとつの楽器を合わせることはじめて、探り探りやってゆくうちにだんだんと、「これやつたら合うな」という音に出合うわけです。二人が出会って、いろいろあるけれど、「それだったら、いっしょに生きてゆくほうがいいな」というストーリーで、最後は大合奏になる。そういう物語と音を組み立ててくれたのです。それがだんだんと発展して、いまでは「東九条マダン」の代表的な演目になって、最近は何年ト리를させてもらっています。

昨年の第22回の「東九条マダン」では、最初に日本の獅子舞の獅子が寝ていて、そこに朝鮮のサジャ(獅子)が登場して、ちょっかいを出してけんかになる。そこに子どもたちがきて、蝶々のように舞って両方をなだめて、2頭はそろって退場し、そこから演奏がはじまるという演出でした。

ところで、私ははじめて韓国に行ったとき、「これ、同じ民族やろうか」と思いました。韓国はほとんど変わっているし、在日は在日で、私は71年生きてきましたから、こちらもずいぶん変わっています。いちばんシヨックだったのは、1995年にはじめて行ったときです。私たちは「ハンマダン」という民衆運動をしているのですが、それをひっさげて行ったのです。韓国の人たちといっしょに練習をすることになっている

のに、1時間たつてもこない。1時間ほど遅れてきて、こっちはカンカンに怒っていたのですが、韓国の人はどう言ったかというところ、第一声が「ケンチャナヨ、ケンチャナヨ」。「どうもない」という意味です。「自分が遅れてきて、なにがどうもないや」という感じですが……。その言葉に象徴されるように、少し違うのです。

私の子どもや孫たちは、両方の民族性をもっているから、二重国籍でもよかったです。それを日本は認めません。最近の韓国では、国際結婚の子どもの多いので、二重国籍を認めるようになりました。私の友人の子どもたちは、日本では日本籍しか認められないので、むこうに行って韓国籍も取ってきました。そして、二重国籍になりました。私は日本籍で「朴」を名のっていますが、最近では「朴・山本」、あるいは「金・村上」、「村上・金」など、ミドルネームみたいに、苗字を二つつける人もいます。

これからこの日本社会で生きてゆく若いコリアン、日本人との国際結婚で生まれた子どもたちは、ストリートに自分を表現できて、新しい社会、新しい環境をつくってゆける、そういう方になってほしいなと思っています。

小倉 ● ありがとうございます。朴実さんのご自分の体験から、最後は日本社会への提言というか、方向性まで出していました。

朴玲華さんは、きょうがはじめてですので、まずは自己紹介をしていただいて、そのあと、お二人の大先輩からいろいろ話がありました。それについての自分の考えやコメントなど、ご自由にお話ください。

在日として生きること、一人の人間として生きること

朴玲華 ● こんにちは。朴玲華です。きょうは少し緊張しています。私は2013年に京都朝鮮中高級学校を卒業して、いまは滋賀県の成安造形大学に通っています。私も韓国籍で、幼稚園から高校まで、ずっと朝鮮学校に通っていました。

小倉 ● これまで生きてこられて、いろんなことを感じましたでしょうか？ 民族や国籍などについて、なんでもよいので、お話しください。

朴(玲) ● これまで生きてきたなかで、国籍などはとくに考えたことはなくて、日本で、住みにくいと思ったことは一度もなかったです。私の母の世代には、在日への差別はすごく多かったと聞きましたが、私の世代では、差別などはとくにないような気がします。たしかに、高等学校の授業料無償化は朝鮮学校には適用されないなど、そういう差別はありますが、朝鮮学校では、近所の日本の学校との交流会などもしています。そこでは国や社会などは関係なく、一人の人間として接することができますので、日本人であっても、道端で会うアメリカ人であっても、自分が朝鮮人であることに負い目などはとくに感じずきました。

小倉 ● それは、朴玲華さんお一人の考えなのか、それとも……。周りの同級生などはどうでしたか。

朴(玲) ● 周りの子たちも、日本人にたいして「嫌い」という、反日感情はそれほどないなかつたと思います。高校3年生までは、朝鮮学校で朝鮮の友だちとずっとつるんできましたが、昨年、大学に入ってから、日本の友だちもすごく多くなって、自分の知らない世界を知ることができたというか……。

小倉 ● 人生を楽しんでいらつしやいますね。それはすごくよいことだと思います。なにかによって行動を制限されたり、差別されるといふことがなく、自分の人生を切り開くことができ、自由に生きてゆけるのは楽しいし、よいことですね。

ですが、少し意地悪くいうと、あなたの周りにいる同じ歳ぐらいの日本人たちは、もしかしたら、あなたの出自やあなたの民族性についてなにも知らなくて、たんに、人と人が会っているのでしょうか。それとも、基本的なことは少しは知っていて、分け隔てなく対等につきあっているのでしょうか。そういうところは、なにか感じることはありませんか。たとえば、あなたが朝鮮や韓国のことを言っても、相手はなにもわかってなさそうだとか、そこに違和感を感じたりすることはありますか。

朴 鈴 ● ほとんどの友だちが、在日という存在を知りません。だから、私が友だちの前で自分の名前を言うと、「留学生？」と。「在日です」と言っても、「それってなに？」ときかれたりします。そこから、「在日は……」と説明をはじめて……。在日についてなにも知らない人がほとんどで、ちゃんと知っている人はそれほどいなかった。

小倉 ● 在日のことを知らなくても、あなたとしては違和感や不快感はとくになかったわけですね。

朴 鈴 ● とくにないです。

小倉 ● ぜんぜんない？

朴 鈴 ● ぜんぜんないです。

小倉 ● それは、まえの世代とは違う感覚かもしれませんね。「なぜ、私たちがいま日本にいることを、あなた



「私たちは知らないのか」と、そのようには思わない？」

朴(玲) ● 知らないのは当然だと思います。ニュースなどを見ても、私たちがここにいるわけなど報道しませんし、日本の学校などでも、私たちが在日のことを話したりするようにはなっていない。だから、私たちのことを知らないのは当たり前だと捉えています。

小倉 ● なにも知らないでつきあっているのだったら、それでいいじゃないかという考えもあるし、やはり歴史をふまえたうえで、対等につきあうと

いう考えもあると思います。

前回、楽屋で打ち合わせをしたときに、キム・ファンさんがおもしろいことをおっしゃったんです。2007年くらいまでは、日本の公立学校では、いわゆる人権教育がさかんで、キム・ファンさんは何回も講演を依頼されて、お話をされたのだそうです。しかし、2007年くらいから、そういうものがピタッとなくなってしまったと。むかしは、人権といえは在日問題と同和問題がメインでしたよね。だけどいまは、朴実さんのお話では、学校などの公的などでの教育も含めて、取り上げられる人権問題は8種類あるそうです。もちろん在日や同和問題はありますが、このほかに性同一性障害や障害者のことなど、いろいろな人権問題があります。だから、在日の問題は、ワン・オブ・ゼムになってしまっただけのことによってとくに大きな問題も起らないから、教育もしなくなっているというのです。

キム・ファンさん、その実態はいいか悪いかですか。そうした人権教育が善いか悪いかということはもちろん



ありますが、キム・ファンさんのご経験から、どのよう
に推移していると感じていますか。

日本は在日の人たちといっしょにどのような
社会を築いてゆけばよいのか

キム ● むかしは、過去の悲しい歴史について懇々と
語るような、そんな講演が多かったようですが、子
どもたちにはとても難しすぎる。日本の学校では、
現代史で教わらないでしょ？ 私も半分は日本の学
校に通いましたが、難しいところは教えないですよ
ね。講演会の依頼者からは、「わかりやすく話して
くれ」ということで、動物の話をとおして、「むかし、
日本と韓国とはけんかをして……」というように、わ
かりやすく話します。かつては講演はたくさんあっ
たのですが、あつというまになくなって、驚いてお
ります。

朴玲華さんの話を聞きながら、「時代は変わったのかな」と思う反面、少し危惧もしております。先週のデイスカッションで、「クリーニング屋のおっちゃんになろうと思っただけど、なれへんかった」という話をしました。「朝鮮学校に行った」と伝え、本名で名前を書いて、クリーニング師の試験の申し込みをしたがゆえに……。ここに新党さきがけの厚生大臣の井出正一さんからの手紙がありますが、厚生大臣から書状をもらわないとクリーニング屋の試験を受けられなかったという、自分の人生における大きなターニングポイントがありました。

じつは、もう一つありまして……。朝鮮学校の生徒たちは、いまは当たり前のように全国大会に出ますが、私が朝鮮学校で教師をしているところは、行けなかったのです。この世の中で唯一、朝鮮学校の地方予選への出場を認めてくれたのが京都市だったのです。ところが、いくつか約束がありまして、「日の丸掲揚のときにはきちんと起立する」、「君が代」を歌わなくてもいいから、席を立たない」。そしてもう一つは、「優勝しても、全国大会には行けません」と。この約束を守るのなら、朝鮮学校の出場を認めるといえるのです。それでわれわれはやっと参加できたのです。朝鮮学校の子どもたちは日本の全国大会には出られませんでしたが、優勝して北朝鮮に行くことが目標なのです。すべてはそこなのです。「勝って、祖国に行くんだ」ということではがんばるのです。

全国大会には出られなかったのですが、唯一、京都市だけが門戸を開いてくれました。私は当時、京都朝鮮第二初中級学校で卓球部の顧問をしていましたが、決戦で強豪校を破って、優勝してしまったのです。でも、全国大会の出場は辞退しました。このことが新聞などに大きく報道されて、制度が変わって、朴玲

華さんみたいに、幸せな子たちがいるわけです。私たちよりももっとたいへんだったのが、朴実先生たちの時代だと思います。もっと上の世代はもっとたいへんでした。こうやってつづいてきたなかで、差別はほとんどなくなっただけだと思っただけです……。

私たちの時代は、朝鮮学校に行っただけで、クリーニング屋にもなれなかった。私はいま作家ですが、キム・ファンという名前だけで本を出して、本屋に並んだときに、どんなによいものを書いて、「韓国人が書いているから読まない」という雰囲気になることが怖いんです。日本の優れた作品で、障害者の差別を扱った丘修三先生の『ぼくのお姉さん』という本や、原田正純さんの『水俣の赤い海』は、韓国で大ベストセラーになりました。日本の作品であろうが、優れた内容の本であれば、韓国人はどんどん読んで吸収しています。でも、日本では、私たちがどんなによい作品を書こうが、韓国人だという理由だけで、買うことをためらうような、そんな雰囲気になっていく気がして……。日本と韓国の両方で仕事をしていますが、韓国のほうに仕事の比重を移さないとだめなのかなというくらい、私たちはいま追いつめられています。そういう状況にあるということ、最後に言わせていただきます。彼女のように幸せになりたいのですが、まだ私はそこまで幸せではないというのが、正直な思いです。

小倉 ● そうですね。20歳くらいの彼女が経験されていることと、これから社会に出て、自分がなにかをしようというときに、職業の選択の自由などがあるかどうかということ、また別問題のように思います。

私はさきほど、「日本に思想がない」という話をしましたが、キム・ファンさんのお話をうかがって、そのことをやはり言うておこうと思います。日本の行政は、ほんとうにたいへんだと思います。思想がないから

たいへんなのです。京都市はキム・ファンさんの学校にたいして「大会に出ていいですよ」という独自の判断をした。そこには思想があった。だけど、日本の国家、あるいはもう少し大きな圏で、思想をもたないといけない。

世界的にいうと、多文化共生に関しては二つの思想があるのです。一つは、多文化主義というものです。多文化主義の「多」は「多い」という字です。マルチカルチュラルイズムともいいます。もう一つは、文化的多元主義というものです。これは二つとも、「異なる文化の人たちと、どう共生してゆくか」という意味では同じですが、「どういう社会をつくってゆくか」ということに関しては、多文化主義と文化的多元主義とはまったく違うのです。多文化主義は、おもにアングロサクソン系のアメリカ、カナダ、オーストラリアがとり入れているもので、文化的多元主義はフランスが中心となっており入れているものです。

多文化主義は、「一人ひとりの尊厳は文化である」と考えます。国籍や民族性という大きな意味も含めて、その人の個性、尊厳は文化であると。だから、すべての人がもっている文化をそのまま尊重するという、そういう考えです。この考えにもとづいて社会をつくってゆこうとしています。

いっぽう、フランス式の文化的多元主義は、そうかんたんではない。つまり、その人の尊厳はどこにあるかというところ、フランス共和国の公民であるということに尊厳の根源があると考えられるわけです。だから、フランスの公的な学校に、イスラム系の人がブルカを被ってゆくことを許さない。つまり、「学校は公的な場所だから、公的な場所ではフランス公民として、普遍的な理念を体現しなくてはいけない。その代わり、それができていれば、プライベートな場所ではいくらでも自由ですよ」と、そういう考え方です。ただし、その人

の尊厳性はどこにあるかといえ、第一義的にはフランスの公民であるということ。そういう考えにのつとれば、フランスにおいて、「私の文化はフランス共和国にまったく相反する文化である。だから、フランスの国旗や国家に尊厳を払わない」ということはまったく許されないので。逆にいえば、多文化主義を掲げている国では、そういうことがあるていど許される。ただし、アメリカでは、アメリカの国旗にたいする侮辱などは許されません。アメリカは理念と現実とが離れているのです。

だから、京都市が朝鮮学校に対して下した判断には、あるていど思想があった。つまり、「朝鮮学校が大会に出られないのは差別になる。だから、出てもらう。しかし、そのときには、日本国民の公民としての理念を体現していただきたいから、国旗掲揚のときには起立してください」ということは強制される。これは差別ではありません。ある社会をつくってゆくうえでのルールなのです。

しかしながら多文化主義と文化的多元主義は、ひとことでは、両方とも、もののみごとにだめになっている、崩壊している。そういう世界の状況です。多文化主義がだめになったのは、ある文化をもっている人たちが閉じこもってしまつて、アメリカやカナダという公的なところに出てこないで、ゲッター化したからです。自分たちの文化だけで生活してゆく人たちが社会の中に増えてしまつと、アメリカ社会、カナダ社会、オーストラリア社会は崩壊します。

もう一つのフランス型の文化的多元主義も崩壊しつつある。2015年1月にイスラムによるテロがありましたね。これは、フランスという普遍的な公民制にたいするあからさまな挑戦です。つまり、思想が二つあるとしても、どちらの道に進んでもうまくいっていないわけです。「異質な人たちと、どういう社会をつ

くってゆくか」ということは、とても難しいところに来ているようです。

私はこの「チョゴリときもの」の取り組みはすごくよいと思うのですが、世界的にみて、日本社会がたいへん遅れていることを証明する場所ではありません。昔話をして、「日本は差別的な社会だね」ということで終わったら、あまり意味がないと思うのです。日本社会に在日の人たちといっしょに築いてきた70年間、もう少し大きくとらえれば100年の歴史がありますから、この経験を活かして、アメリカ型でもない、フランス型でもない思想をここからつくりあげてゆくことを、みんなで一所懸命に考える場所になれば、たいへん意味があると思うのです。そういうことを後半でまた一所懸命に考えることにしましょう。

私の話が長くなって申しわけありません。ここで休みを取りますから、ぜひともご意見やご質問をお寄せください。後半はそれをできるだけ反映させながら、議論を進めたいと思います。ありがとうございます。

司会 ●では約15分間の休憩を取りたいと思います。お配りしています質問票にぜひご記入いただき、前に置いてあります箱にお入れください。よろしく願います。(了)

シリーズ
II

公益財団法人 京都市国際交流協会
連続フォーラム「チョゴリときもの」第22回
国籍—国籍を選ぶとき その背景にあるもの

在日社会と日本社会の変化と関係性

第2部 質疑応答

日時 ● 2014年3月27日(金)

場所 ● kokoka京都市国際交流会館

進行 ● 小倉紀蔵 京都大学大学院 人間・環境学 研究科 教授

パネリスト ● 朴実(パク・シル) 日本籍、在日二世、音楽家

● キム・ファン 韓国籍、在日三世、絵本作家、児童文学作家

● 朴玲華(パク・リョンファ) 韓国籍、在日四世、学生

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● 時間になりましたので、ここから、みなさまにいただいたご質問、ご意見をもとに、第二部を開始させていただきます。小倉先生よろしく願います。

小倉 ● いくつかのご意見とご質問が寄せられました。一つめは、「知らないから差別をしないのではなくて、知っていても差別をしない人間づくりを、行政、地域、国民一人ひとりが解決するべきではないでしょうか。いまは、臭いものに蓋をする社会になっているのではないか」というご意見です。

「差別意識がないのはすごくいいと思うのです。歴史を知らないのはしかたがないのかもしれませんが、歴史を知らないで、のほほんという日本の若者には、私はかなりいらだつのです。おとながいろんなことをしなくてはならないのですが、教えようと思っても若者は逃げてゆきます。どのようにすればよいのか……。

いまの日本の若者は、日本と朝鮮半島の関係、あるいは日本とアジアの関係を知らない。だから、差別意識もないということなのですが、では、知ったらどうなるのか、どういう反応が出るのか。冒頭にご紹介した先週のご意見のなかに、「知ったからこそ、差別意識ができた」というお話もありました。この点はどうなのでしょう。みなさんでいっしょに考えなくてはならない問題です。お互いのことをなにも知らないで、旅行者のように出会って、仲良くなるのがよいのか。それとも、知ってしまうと、「嫌い」や「差別する」という感情が出てしまうのか……。これは人権教育などでいつも問いかけられる問題です。

日本社会における在日の将来

小倉 ● 次の方のご意見はすごく壮大なスケールです。「たとえば、2000年後の日本の社会で、在日のみなさまの状況はどのようになっていいると思われませんか」。これはお三方それぞれのお考えがあるでしょうから、お答えいただきましょうか。朴実さんからどうぞ。

朴 ● 2000年後まではあまり考えたことはありませんが、1000年後くらいだったら考えたことはあります。一つのヒントとして、2000年まえ、日本はどうだったのかというと、江戸時代の後半でしょうか。室町時代から江戸時代にかけては、みなさんもご存じのように、朝鮮から日本に朝鮮通信使が行き来していました。文化的先輩として、朝鮮は尊敬はされていきましたから、差別意識などなかった。そうすると、2000年後の日本は、希望的な意味を込めて、いまのような差別や国籍などにこだわる考え方からもう少し自由であってほしいなど。グローバル化して、差別意識が取り払われた社会になってほしい。

小倉 ● ありがとうございます。2000年後のことだからだれもわかりませんが、とうぜん希望的な観測になりますよね。キム・ファンさんはいかがでしょう。

キム ● 私も朴実先生と同じ考えで、国や民族というもののへのこだわり、垣根がもつと低くなって、もつともつと個人をきちんと見つけるような、そのような方向に進んでいると思います。1000年まえの例を挙げても、国にも一等、二等などといわれるような時代があつて、国民国家主義があつたのですが、いまはそのようなことはありません。みなさんの努力で、そうなつてきたと思うのです。在日一世や二世が苦勞したぶん、私

は在日三世ですが、だいぶ楽になりました。そして、私たちががんばったぶんだけ、朴玲華さんのような四世が楽になっている。そういう具合に、垣根が低くなっていると信じていた。また、そうなるために、がんばってゆこうと思っております。

朴(玲) ● 私は、200年後の日本では、朝鮮学校が少なくなっているのではないかなと思います。在日三世のころにくらべると減っています。日本全体も少子化が進んでいるし、それにともなって、在日朝鮮人の人口もどんどん減っている。自分たちのルーツやアイデンティティを学ぶ朝鮮学校があるからこそ、在日の同胞が成りたっていると思うので、その学校がどんどん減ると、在日同胞も、少し悪い意味で、どんどん小さくなってゆくのではないかなと思います。

小倉 ● それは望ましくないという意味なのですね。

朴(玲) ● 何年後かには、私たちの在日同胞がなくなるかもしれないという話題を、同級生と学校で話し合ったことがあります。自分たちの将来の話をするときに、私たちの住む同胞社会のこともかならず話題に出ます。私たちは「何人として生きてゆくのか」と考えたときに、同胞社会は私たちのルーツだから、なくなつてほしくないと思います。

小倉 ● ありがとうございます。200年後は、なかなか想像はできませんが、いちばんの「悪魔のシナリオ」は、世界が完全に一色化してしまうことですね。アメリカ、あるいは中国かもしれないですが、自分たちの文化こそが世界の普遍性であると主張する勢力が、軍事的な力や経済的な力を背景に世界を一色化してしまおうという……。それにたいして、われわれは全面的に対抗しなければいけない。在日の方というのは、日

本社会にいる韓国・朝鮮の人たちだから、これとは構造はちがいます。日本のなかで在日文化を守るというと、さらに一段階、構造が複雑です。そこをどう考えるかは重要です。この方のご質問はかなり本質的なところを突いてらっしゃると思います。

変えようという、主体的な努力で社会は変わってきた

小倉 ●次はご意見です。「朴玲華さんの『これまでとくに困ったことや違和感がなかった』というお話は、いまの若い人というだけではなく、いまの世の中を表わしているように感じました。在日の方が普通に生活していられるということでもあるのでしょうか、逆に自分以外のことに関心がないということもあるのではないのでしょうか。日本の若い人たちは子どものころから、韓国ドラマや映画、K-POPなどの音楽などが身の周りに普通にあつて、親しみがあることも背景にはあるのでしょうか。ただし、先人たちが感じて感じてこられた歴史や体験などが置き去りにならないければよいのですが」。

これもまた難しい問題を提示されていますね。仲がよければ、文化などがなくなってしまうてもよいのか、それとも、やはり文化を守ることが大切なのか。あるいは、先人たちの歴史や経験に自分の寄りどころを置くべきなのか。あるいは、いまがよければよいのかという話ですね。

もう一つ。べつの方のご意見です。「差別はあるかないか、差別はなくなるかならないか、判断は難しい。差別への問題意識がなくならないように、日々自分が気をつけるしかない」。

これはすごく重い言葉ですね。「日々自分が気をつけるしかない」。つまり、「気をつけていなければ、差別は起こってしまうかもしれない」ということでしょう。差別をなくす、あるいは差別をしないということについて、日々われわれが自分自身で気をつけるしかないという。そういうことを考えないで生きるほうが楽なわけですから。「差別を感じたことがない」というのは、厳しいようですが、少し甘いのではないかなというご意見です。

べつの方は、「世代が変わるにつれ、苦勞が減ってゆくような印象を受けましたが、なにがその苦勞を減らしてきたのでしょうか」。これも本質的な質問ですね。哲学的な質問かもしれませぬ。「世代が変わる」というのは、こちらのお三方のことだと思えます。朴実さんから、キム・ファンさん。そして、朴玲華さん。世代が変わってゆくわけです。

キム●最初にも言いましたが、「韓国と日本」というように捉えがちなのですが、私は「日本人にいちばん身近な外国人」として生きて、リトマス紙の役割をしないとイケないかなと思つています。「クリーニング屋のおっちゃんに、なんでなれへんの?」とか、いま受けられますが、かつては、「国公立を受けるには、大入学資格検定が必要だ」とか、「朝鮮学校は全国大会に出られへん」というような時代があったわけです。だから、町内会の会費を払って、いっしょに銭湯に行つて、背中を洗っている仲間が、「え、そうなん?」ということに気づくことがだいじやと思つのです。「あんたらはそういうけれど、在日の人は税金を払わんでええんやろ?」と、そんなことを言う人もいます。「いや、払っているで、ちゃんと。でも、選挙権がないねん」という話になってゆくわけです。身近な人が身近なことを語る事がだいじです。語り合いながら、日

本はほんとうに暮らしやすい社会なのかどうか、考えることがだいじなのです。

韓国の例を挙げます。私は韓国にはじめて行ったときに、本が売れたのでお金、印税をもらったのです。ところが、入金してもらった通帳がくれませんでした。私は韓国人ですよ。韓国籍なのに、韓国の郵便局では、日本の「ゆうちょ」みたいな通帳がくれなかったのです。韓国に住んでいる人には、13桁の国民登録番号というものがが必要です。来週、私は韓国のある図書館で講演するのですが、「登録番号を教えてください」と図書館側がたずねるので、「ない」と言ったら、「住民登録番号をもっていない韓国人がいるなんて、はじめて知りました」と、さきほどメールがきました。わかっていないのです。われわれは韓国人なのに、数年まえまでは、韓国の郵便局で通帳がくれられないし、カードも持たせてもらえなかった。郵便局はだめでしたが、ほかの銀行はだいじょうぶでした。私が銀行通帳をつくったのは在日の人がつくった「新韓銀行」です。仁川空港の郵便局の店長が、「新韓銀行ならつくってくれる」と教えてくれたからです。この一部始終をみている出版者の人たちはみな驚いていました。

まわりくどいことを言いましたが、不自由なことを目の前にして、気がついた人がどんどんそれを変えてきてくれたのです。私は偉そうに言いましたが、「大臣に手紙を書きましょう」とすすめてくれたのは京都府庁の方です。「あなた、私とがんばりませんか」と。多文化共生社会を一所懸命につくろうとしてくれるのは、日本人です。本質的には、在日ががんばったから差別がなくなったのではないのです。差別があることを知って、変えようとしたみなさまがいて、はじめて社会は変わったのです。私たちはいっしょに住んでいるし、町内会費も払っているし、いっしょに銭湯に行っています。が、「こんな不自由があるねん」

ということを言いつづけることによって、その主体であるみなさま方が「変えていかないといけない」と考えてくれたらいいと思います。

小倉 ● ありがとうございます。朴実さん、どうぞ。

朴(実) ● 振り返ってみれば、私たちの親世代、在日一世のころはほんとうにたいへんでした。就職先もないし、公営住宅に入る権利もないのです。国民健康保険もなかった。でも、それを訴え、勝ちとってきた。在日一世たちは「せめて在日二世は……」と。私は自分たちの子どもに、「せめて在日三世は……」、次の世代は「在日四世は……」というように、自分よりも次の世代のためにと考える。これは人間の本質ですね。そして、日本人ともいっしょになって人権意識の啓発や、人権教育などに取り組みました。たとえば、私たちは1981年と1992年に、京都市教育委員会にたいして、外国人教育方針をいっしょにつくろうと提案しました。1992年につくられた「京都市立学校外国人教育方針」は、副題として、「主として在日韓国・朝鮮人にたいする民族差別をなくす教育の推進について」とあります。これをいっしょにつくったのです。ですから、一つひとつの積み重ねです。『パッチギ!』の舞台になった鴨川の土手の東九条のバラックもなくなりました。そして、みんな市営住宅に入りました。

以前は、在日の人たちは京都市の職員や学校の教員にはなれなかったのですが、いまはなれるようになりました。いっしょに闘って、いっしょに変えてきたのです。でも、現実には、ここに公務員の方や先生方もおられますが、管理職にはなれない。学校現場では在日韓国・朝鮮人の差別をなくすようにと「京都市立学校外国人教育方針」に書かれていますが、いっしょの教壇に立っていても、常勤講師の立場でしかない。せい

ぜい課長代理くらいで、教頭や学年主任にはなれない。これが何年つづくのか。まだまだ課題は多いと思いますが、一つひとつ、お互いが問題提起しあって、解決してゆくべきだと思います。

小倉 ● ありがとうございます。朴玲華さんは、なにかコメントがありますか。

朴(玲) ● 苦勞が減ってきたということは、すごく実感はしています。やはり、朴実さんもおっしゃったように、在日一世、二世、三世が、次の世代のために努力をされて、それでいまの私たちがいると考えています。次の世代のために尽くしていただけたから、苦勞が減ってきたのだと思います。在日一世と在日四世の違いとか、その差は、主体であるかないかということだと思います。自分が困難な状況下に置かれたからこそ、「この状況をなんとかしないと」思って、自分たちから変えようと取り組まれた。それにくらべて、私たちは環境が整いすぎて、整ったから住みやすい環境になったとは思うのですが、その代償で、主体性を失っているように思います。主体性の喪失は、自分たちの歴史などを置き去りにしてしまう傾向につながっていると思います。

小倉 ● ありがとうございます。お三方、とてもいいお話でしたね。三人それぞれの視点が違うわけですが、よく納得できました。

人間としての自由を勝ち取るために

小倉 ● それでは、次のご意見です。「日本国籍を取らないものは、差別をされてもしかたがないとおっしゃ

っているみたいです」と。これは、どなたにたいする意見かわかりませんが……。

朴(美) ● おそらく私にだと思えます。日本籍朝鮮人は、いまは多くの方に知られるようになりましたが、かつては同胞社会でも日本の社会でも、あまり認識されなかった。在日といっても韓国籍、朝鮮籍、日本籍、あるいはダブルなど、さまざまありますので、そういうものをお互いに認めあって生きてゆこうということをお伝えしたかったです。いまほどの同胞家庭にも日本籍者がいます。だいぶ浸透して、朝鮮学校にも日本籍者がいますから、ずいぶん変わってきたことは事実です。

少し話が変わりますが、先週も少しふれましたが、気がかりなのは、最近よくいわれる「ネット右翼」です。在特会が京都市内にもたびたび現われて、東九条の京都朝鮮第一初級学校にも来て、裁判にもなりました。幸い勝利しましたが、子どもたちに傷を残しました。それはもう聞くに堪えないことばで、私たちの孫の通っている学校でも、近くの児童公園でも、あるいは児童館の横でも、あのようなことばをわめきました。その影響を受けてかどうかわかりませんが、友だちどうしで、これまで聞いたこともないような、とんでもない発言を同級生がするということです。「朝鮮帰れ」、「汚い」、「ニンニク臭い」などと。そういうことを言ったらあかんということを学校教育で教えられてきたのに……。これは、たんに一部の者かもしれないですが、こういうことがなくなる社会をつくってゆきたいと思えます。

小倉 ● そうですね。さきほどのご意見にあつたように、「差別への問題意識がなくならないように、日々自分が気をつけるしかない」という、ここが重要で、「差別はなくなつた」、あるいは「むかしにくらべれば軽くなったから、安心してもいいんだ」というようにはならないようです。ここが人間社会の痛いところなのです。

もう一人の方です。少し長くお書きになりましたので、要点だけをいうと、「けつきよくは人と人との問題なのだと感じている」というお話です。そのことをいろいろな事例を挙げて、お書きになってくださいました。この方は「韓国の俳優を知って、ハングルを習った」。そして、「日本と韓国の歴史を勉強した」そうです。「日本と韓国とのあいだで歴史観がこんなに違うこともわかったし、それについて、『謝りたい』と韓国の方に申し上げたら、『ありがとう』と言ってくださった」そうです。人と人がどういう信頼関係をつくるのかということだと思えます。全文をご紹介できなくて申しわけありません。

最後です。「朴実さんが前半に『東九条マダン』で物語をつくったとおっしゃいました。これが、これから日本社会がどうなっていくかを考える、一つの道になるのではないかと感じました。だが、どのようなその物語をつくるのか。だれに向けて語るのか。なんのために……。などなど、いろいろ考えるべきことはありそうですが、日本人と在日の人たちとがいつしよにつくってきた戦後の社会ですから、この物語をどうやってつくっていくか、あるいは記憶してゆくかが重要ではないか」というご意見です。

朴実さんたちの「東九条マダン」は、料理の屋台も出ますし、おばあさんたちの習字なども展示されています。小学校の校庭を借りて開催されますが、その場所全体に多様な物語が渦巻いている。そういうことを狙ってらっしゃるのだらうと思います。それを消さないで、つなげてゆくにはどうすればよいのか、朴実さんの実践はどういうことなのでしょう。

朴(美) ●「東九条マダン」のチラシの裏には、「在日コリアンと日本人、そのほかのともに生きるすべての人たちがマダンをつくることを通して、おたがいに自己解放を勝ち取ろう、自己解放を得よう」と書いてあり

ます。差別というものがある以上、差別される側も差別する側の立場の人も自由でありえないし、自己解放は得られないと思うのです。そういうものがなくなるには、まだまだ何年もかかるかもしれませんが、「東九条マダン」をつづけるという作業をとおして、地域社会でいっしょに生きてきた。その過程をとおして、人間としての自由を勝ちえたい。そういう願いなのです。その気持ちをつないでゆきたい。

私はクリエイティブということばが好きです。次の世代が新しいものを産み出せるような、そういう場をつくりたいと思っています。宣伝になりますが、今年も11月1日の日曜日に、元陶化小学校で「東九条マダン」を開催しますので、ぜひきてください。

小倉 ● どうも、ありがとうございます。私の家は東九条から近いので、私の研究室の学生を連れて、朴実さんに東九条を案内してもらっているのですが、あそこは空き地が多いですね。つまり、在日同胞がそこに残らないで、よそに行ってしまうという現実があるのです。これは東九条だけではないでしょう。もう少しせさららにいうと、在日同胞はここに住んでいたくなくて、よそに行ってしまうのです。そういう人たちに、なんだかんだということはもちろんできないし、どこに住むのかは個人の自由です。けれども、東九条だけではなくて、いろんな歴史が堆積した場所は重要であって、かけがえのないものです。そういうものを上から目線ではなくて、物語としてどうやってつくってゆくのが、やはり重要です。「私たちはたいへん意義のあることをしているから、あなたも参加しなさい」と言ったら、みんな来ない。難しいですね、これは。朴実さんのお話を聞いていて、ほんとうに難しいことをやっていらっしやると……。行政や日本人たちがいっしょになってやらないと、おそらく……。



東九条の在日の歴史や同和の歴史を語り継ぐ場が減って、たとえば、京都市立芸術大学が移転してきて、街がきれいになって、それで、みんな忘れてしまっただけというわり、ということになってしまっているのではないかと感じるのです。でも、朴実さんは物語をずっとつづけてゆくという意志をおもちだし、その志を継いでくれている人がいるわけだから、少なくとも東九条では、希望を見いだすことができますが、ほかのところではどうかわかりません。

朴玲華さんは、小さいときからずっと朝鮮系の学校に通っていたから、自分のルーツをはっきりと認識しているし、朝鮮の文化にたいしても身近ですよ。ですが、朴玲華さんと同じ歳の若い同胞のなかには、そうでない人もたくさんいますよね。もっと上の世代の人たちから、「われわれの歴史はこうだったんだ」、「こーやって生きてきたんだ」、「こーいう物語があるんだ」、「あなたたちもそれを共有してほしい」と言われたら、い

かがでしようか。「この社会で差別も受けずに楽しく生きているのだから、そんな煩わしいことにはかかわりたくない」という人たちも、同じ歳くらいの人たちにはいるでしょうね、おそらく。そういう人たちにたいしては、どういうメッセージを投げかけたいですか。

朴(鈴) ● すごく難しい質問です。一人ひとりの考えをまずはきちんと尊重したいという気持ちもあるのですが、同じ民族としては、自分がなぜここにいるのかを知ることが、その人が生きてゆくなかでとても重要な資料というか……。自分のアイデンティティを知っているからこそ、人生をどう生きるか、人生の糧になると私は思うのです。「自分には関係ない、むかしのことや」と割り切ってほうり出さないうで、「知る」ということだけでも向き合ってほしいと思います。

小倉 ● それだけでも充分に価値のあることですね。私はもう一歩進んで、文化というものについての考え方を変えると、朝鮮文化、韓国文化というものは、朝鮮の人や韓国の人だけが受け継がなくてもよいと思うのです。私は韓国の文化が大好きです。日本人だから入り込めない部分ももちろんあるのですが、日本人が韓国文化を継いでもよいし、韓国人が日本文化を受け継いでもよい。でもそこに、アクセスできるなにかがなければ、消えてしまう。記憶したり保全しておけば、これまでまったくかわりのなかった人たちが、「これ、おもしろいよ」とやりはじめられるかもしれない。あるいは50年後、100年後に、だれかが「これはおもしろい」と接近して、新たに再解釈して、新しいものをつくるかもしれない。文化とはそういうものだと思うのです。だから、やはりその物語というか、文化としての記憶を、どうにかして残してゆく必要があると思うのです。それは、いまのためだけじゃない。

そのために、やはりわれわれは、韓国・朝鮮の文化だけではなくて、日本文化も絶対に減ばさないうで、どこかに残しておく必要があると思うのです。ここ最近、韓国の人がたくさん日本にきて、日本の和食や能を勉強したり、いろんなことをしています。それが文化のほんとうのあり方で、「〇〇民族の文化やから、ほかの者は接近できない」と制限する必要はない。それをまさに朴実さんは、「東九条マダン」で実践しておられるのですね。

アイデンティティをたいせつにする生き方と国籍にとらわれない生き方をめざして

小倉 ● 残り時間が少なくなってきました。きょうの全般的なお話や、とくに将来に関して、お三方に最後に2分くらいずつ、これだけは言っておきたいということがあればぜひどうぞ。

朴実 ● もう充分に話したので、かんたんになりたいと思います。一つは、私たちが在日コリアンがここに存在しているという歴史的経緯、それは前提にあつて、忘れてはならないことだと思えます。そして、将来は一人ひとりがどんな立場であろうとも、それぞれが認められるような、そういう社会になってほしい。

でも、そこに行きつくには、まだまだ課題が多いと思えます。この京都でも、地域社会でも、あるいは制度の面でも、克服しなければいけないことがたくさんあります。それは当事者だけではなくて、みなさんといっしょに解決する必要がある。そして、未来を担う子どもたちに少しでもよいものを残したいと、そのように願っています。

キム●少しだけ宣伝をさせてください。この『サクラ』という本を書いた理由の一つは、韓流スターのリュ・シウォンという人が2005年に『桜』というCDを出したことです。「韓国人なのに、『桜』というタイトルのCDを出すなんてけしからん」と、そうとう叩かれました。ところが、来週、このゾウさんの本の関係で韓国に行きますが、私だけが講演するのではなくて、「ゾウのラウンドテーブル」というイベントもするのです。「タイにサクラちゃんを返そう」という人もいれば、「動物園自体に反対だ。動物を檻に入れるのは納得できない」という動物保護団体もいる。「動物を展示して、子どもたちに見せることに意味がある」という飼育員もいる。そして、本を書いた私も含めて5、6人がひとり30分ずつ話すのです。いろんな立場の人がいろんな意見を言える。リュ・シウォンが『桜』というCDを出して袋叩きにあったのは10年まえです。いまはこのゾウさんの本をテーマに、いろんな意見の人たちが自由に語れるようになった。韓国の民主主義もだいぶ発展したと思うのです。

このように、たとえばゾウさんをテーマに、侃々諤々やればよいのです。日本人も韓国人も在日も侃々諤々議論して、お互いにとつてよい社会はなにかを突き詰めていったらよいのです。そのためには、接着剤がいるし、渡し役がいる。私は日本人でもなく韓国人でもない、中途半端な人間です。韓国で暮らしていないから、むかしの韓国のアニメの歌はわからない。カラオケに行っても、いっしょに歌える曲がない。日本のみなさんといっしょにカラオケに行くほうが歌える。(笑)

生きてきた環境がぜんぜん違う。国籍こそ韓国であって、韓国語をしゃべって、向こうで商売をしています。韓国人ではない。では、日本人かといえ、ぜんぜんアイデンティティが違うから、日本人でもな

い。中途半端な自分に、むかしはおおいに悩みました。「完璧な韓国人になるにはどうしたらよいか。完璧な日本人になるにはどうしたらよいか」と。こうしてこれまで55年間生きてきた結果として、「中途半端のどこが悪いん？」と。「中途半端やからこそ、できる仕事があるやないか」ということで、いまはつなぎ役に徹しています。「つないでこそ、在日や」と思っています。韓国と日本で侃々諤々できるよう、日本人の立場もわかり韓国人の立場もわかる私の特性を活かして、これからも生きてゆこうと思います。どうもありがとうございます。

朴(玲) ● 今回のパネルディスカッションは、自分自身をふり返ることができて、勉強になりました。

私は、日本、韓国、朝鮮など、そういうことはぜんぜん関係なく、人と会話をするとき、「あなたは韓国人だから」ということを前提に話をしたくないなと思っています。でも、私は大学で、はじめて日本の子たちとたくさんしゃべるようになったのですが、作品の話などをすると、「やはり朴玲華さんは、在日的な要素を作品に込めているね」と言われることがあります。自分はそういうつもりじゃないのに、これはなにかしらと思います。周りから見れば私は在日だから、「作品もぜんぶ在日一色に染まっているよね」という捉え方もたまにされます。私はそれが嫌です。作品の本質が、国籍などのせいで濁ってしまうときもある。だから私は、人と話すときは……。

小倉 ● おっしゃりたいことは十分に伝わっています。最後のことを探しているのですね。

朴(玲) ● はい。締めのことばを探していました。

小倉 ● でも、十分に伝わっています。

朴(玲) ●では、それでいいです。

小倉 ●どうもありがとうございます。

いい話を聞くことができました。みなさん、包み隠さず、ストレートなお話をありがとうございます。朴実さんの「東九条マダン」が11月にありますが、それとはまたべつに、4月にもイベントがあるそうです。

朴実 ●きょう、みなさんにチラシを配ろうと用意していたのに、鞆に入れるのを忘れてしまいました。(笑)

4月18日の土曜日に「第4回東九条春祭り(京都市地域・多文化交流フェスティバル)」を開催します。場所は河原町八条と九条のあいだ、東寺通の信号を少し東に入ったところにある「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン」です。「東九条マダン」の春バージョンみたいなものです。「東九条マダン」の関係者には、「1年に1回するのもたいへんやのに、またこんなん始めやがって」と怒られています。(笑) 私はすじ焼き肉を焼いていますので、ぜひ食べにきてください。

小倉 ●これで今年の2日間にわたるセミナーはすべて終わりです。私としても、ほんとうに充実していました。やはりさいごのメッセージは、「これから日本社会をどうやってつくってゆくか」ということでした。私の感想は、「思想から入るのではなくて、経験から思想を練り上げないといけない」ということです。みなさんもそれぞれの考えをおもちになってお帰りになると思います。きょうはほんとうにありがとうございます。

司会 ●あらためて、パネリストの朴実さま、キム・ファンさま、朴玲華さま、小倉先生、ありがとうございます。

ます。そして、たくさんのご質問とご意見をいただきましたみなさま、本日はご参加いただき、まことにありがとうございます。

もう一点、みなさまにお配りしています1枚のチラシがありますが、明日（3月28日）から4月12日まで、このkokoka京都市国際交流会館で、『春！kokodaおもてなし広場』というイベントを開催します。インクライン沿いの桜がちらほらと咲きはじめていますので、あと数日もすれば満開になるかと思えます。kokoka京都市国際交流会館にもぜひいらしてください。本日はまことにありがとうございます。（了）

あとがき

「未来」に視点を定めたステージⅡでは、まず基本的なテーマを再設定する方針をたて、昨年の「名前」につき、2年めは「国籍」を選びました。

在日コリアンの「国籍」選択は「名前」同様、個人の意思が可能な限り尊重されることが望ましいことでしょう。「外国籍」を選択したい人びとはそのように、「日本籍」を選択したい人びともそのように。しかし在日コリアンのそれはあまりに複雑であり、「生き方」、「信念」また「想い」などのみで選択できるものではなかったのかもしれない。

百年以上の在日コリアンの歴史には、家族のあり方や生活の仕方、そして、なにより日本を中心としたそれぞれの国の情勢の移り変わりなどが縦横に組みあわさっています。それゆえ「国籍」の選択についても、国の方針や法律などとともに、在日コリアン自身のなかに、かんたんに決定を下すことができない葛藤が長い時間存在しました。それは長いあいだ、「日本籍」への変更をよしとしなかった在日コリアン社会のあり方や、変更を受容しきれない日本社会の未熟なあり方が生んだものであったのかもしれません。

現在日本には、朝鮮半島を故郷とし、朝鮮人以外の「自身」を考えることはない一世、一世を親にもち、日本で生まれ育った二世、そして、日本で生まれ育った親をもつ三世、日本で生まれ育った親や祖父をもつ四世の在日コリアン。そして、同様にその次の世代も日本社会を構成しています。法務省統計によりますと、

全国外国籍市民のなかで最大であった韓国・朝鮮籍数が中国籍に代わった2007年以降、韓国・朝鮮籍の減少傾向が大幅につづいています。2008年以前は千名単位の減少であったのが、以降は一万名を超える数の減少が確認されます。これは、在日コリアン社会の世代構成の変更と無関係ではないと考えられます。今回は、年齢も立場も異なる4名のパネリストのみなさまにそれぞれの考えや意見をうかがいました。それらの言葉に再度ふれ、あらためて他者への「尊重」と「受容」の重要性について考えるときをもつことができました。パネリストのみなさまと進行役の小倉先生にあらためて感謝申しあげます。ありがとうございます。

公益財団法人京都市国際交流協会 事業課

岡村敦子／木林愛美

チョコリときもの シリーズII

日本社会に生きる異なる文化背景や国籍を持つ人々と日本人が互いに尊重し合える社会の構築を進めます。

連続フォーラム No.22 「国籍」

—「国籍」をえらぶとき その背景にあるもの—

① 民族とアイデンティティ

第1部 パネルディスカッション

- ・植民地時代の創氏改名（皇民化政策）
- ・「日本籍」、「韓国籍」、「朝鮮（籍）」の選択
- ・「朝鮮（籍）」は「北朝鮮籍」ではないということ
- ・「国籍」と「アイデンティティ」、「名前」との関係
- ・「民族性」との関係

第2部 質疑応答

日時 2015年3月20日(金) 14:00～16:00 開場13:30

会場 kokoka京都市国際交流会館

地下鉄東西線「嵐上駅」下車 徒歩6分

対象 一般 要申込(定員 先着50名) 参加費 無料



進行 小倉 紀蔵氏 (京都市立大学大学院人権・環境研究科教授、専門は韓国哲学・韓国・文化社会論、東アジア比較思想など。)

② 在日社会と日本社会の変化と関係性

第1部 パネルディスカッション

- ・在日コリアンの今後の国籍選択の推移について
- ・「民族」と「国籍」の概念の違いを知る同一視の中止
- ・民族のルーツを保持しながら「日本」の地に生きる「在日コリアン」から、「コリアン系日本人」への可能性
- ・在日社会と日本社会の変化

第2部 質疑応答

日時 2015年3月27日(金) 14:00～16:00 開場13:30

会場 kokoka京都市国際交流会館

地下鉄東西線「嵐上駅」下車 徒歩6分

対象 一般 要申込(定員 先着50名) 参加費 無料

申込み (公財)京都市国際交流協会 TEL: 075-752-3511 FAX: 075-752-3510 e-mail: office@kcof.or.jp

主催 (公財)京都市国際交流協会 1606-8526 京都市左京区聖徳川1番町2-1